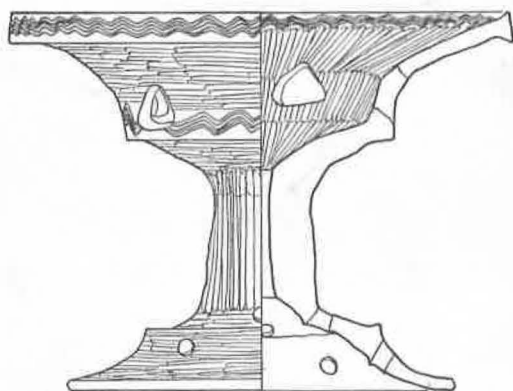


馬場川遺跡発掘調査報告



1977. 3

東大阪市遺跡保護調査会

はじめに

生駒山地の西麓一帯は、古代より人々が生活を営んだ場所であり、したがって現在までに数多くの遺跡の存在が知られている所があります。今回の報告は、これらの遺跡の一つである横小路町3丁目から4丁目に広がる馬場川遺跡について調査したものであります。この遺跡は、現在までに数回にわたる調査を実施し縄文時代晩期から古墳時代初期まで断続的に人々が居住していたことが判明しておりますが、遺跡の範囲が75,000㎡と広大なため未だ詳細については完全に解明されていない面があると考えられます。

今回の調査は、住宅の新築に伴って行なったもので、規模としてはさほど大きなものではありませんでしたが、発見された2つの井戸から出土した土器により中河内における弥生時代終末期の一端を明らかにする新知見を提供することができました。

この報告が周辺地域史研究の一助となり、文化財保護への一層の理解と認識を深めていただけることになれば望外の喜びとするところであります。

最後に、この調査を実施するにあたり御協力をいただいた土地所有者の出口芳興氏をはじめとして、報告出版にいたるまで直接、間接にかかわらず援助をいただいた関係諸機関、学生諸氏に心より感謝の意を表します。

昭和52年3月31日

東大阪市遺跡保護調査会

理事長 小林 俊 一

例 言

1. 本書は、東大阪市教育委員会により昭和49年度の国庫補助事業の一環として住宅新築にともなって緊急調査が実施された馬場川遺跡内、横小路町4丁目744番地の発掘調査報告である。
2. 調査は、下村晴文・福永信雄を担当として昭和50年2月14日から2月17日までの4日間にわたって実施した。
3. 調査によって出土した遺物の整理は、昭和50年度東大阪市教育委員会の委託事業として東大阪市遺跡保護調査会に委託された。
4. 本書の各項のうち、Ⅰを下村晴文が、Ⅱ・Ⅲを福永信雄が、Ⅳを芋本隆裕がそれぞれ担当し、Ⅴを福永・芋本両名が協議して執筆した。
5. 本書に収載した実測図は、調査に参加した全員の協力によって作成され製図は芋本隆裕・松田順一郎が担当した。
6. 出土遺物のうち、土器の復元は本田圭子・葛本高子・井田和太の手によるものである。
7. 図版に収めた写真は、遺構を福永信雄、遺物を上野利明が主として撮影したものである。
8. 調査に際しては、飯塚典正・才原金弘・今井 清・福永誠次・山本佑作・和田法子・信定悦子の諸氏から協力を得た。記して謝意を表したい。
9. 本書に掲載したこの地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭52近複、第81号

本文目次

I	調査に至る経過	1
II	位置と環境	2
III	調査概要	4
	1号井戸	4
	2号井戸	4
IV	出土遺物	6
V	まとめ	19

挿図目次

第1図	周辺地形図	3
第2図	1号井戸実測図	5
第3図	2号井戸実測図	5
第4図	調査地点平面図	5
第5図	出土土器器形別対照表	20

図面目次

- 図面 1. 弥生土器・土製品実測図 長頸壺(a)(b)(c)(d)(e)、広口壺(a)、異形土器、土製勾玉
2. 弥生土器実測図 直口壺、広口壺(b)、高杯(a)(b)、器台
3. 弥生土器実測図 2重口縁壺、加飾する高杯、器台、有段杯部の小型高杯、碗状杯部の小型高杯、布留式に続く高杯
4. 弥生土器実測図 甕(a)(b)、胴内面を削る甕(a)(b)
5. 弥生土器実測図 甕(a)(b)、胴内面を削る甕(a)(b)
6. 弥生土器実測図 鉢(a)(b)(c)(d)、手焙形土器、脚台

図 版 目 次

- 図版 1. 遺跡周辺航空写真（西より）昭和48年撮影
2. 上 1号井戸出土状況 下 2号井戸出土状況
3. 上 第2次供献土器出土状況 中 供献土器出土状況 下 第1次供献土器出土状況
4. 上 2号井戸発見状況 中 2号井戸土器出土状況 下 2号井戸堆積土断面
5. 弥生土器 壺
6. 弥生土器 壺
7. 弥生土器 壺、高杯
8. 弥生土器 壺、高杯、器台
9. 弥生土器 甕
10. 弥生土器 甕
11. 弥生土器 甕
12. 弥生土器 鉢
13. 弥生土器 鉢、手焙形土器、異形土器、壺
14. 弥生土器 甕の叩き目、高杯、器台の装飾

I 調査に至る経過

昭和49年5月18日付をもって、出口芳興氏より、東大阪市横小路町744番地における土木工事等による発掘届の提出が東大阪市教育委員会にあった。市教委では、土木工事予定地が周知の馬場川遺跡の範囲内にあたるために、縄文時代の集落跡が続くことが十分に考えられるため発掘調査が必要であると判断した。ちょうど昭和49年度事業として馬場川遺跡の緊急調査を予定していたため、まず予定地の試掘調査を実施してみるようになった。

試掘調査は、昭和49年11月10日より約7日間実施した。詳細は、報告書^①を参照していただくことにして、調査の結果、当初の予想に反して、縄文時代の遺構、遺物は何ら発見されず、上層で弥生土器が若干発見されただけであった。この結果だけでは発掘調査が必要と思われなかったが、居宅建築工事が当初軽量鉄骨の予定が鉄筋コンクリート造になり、基礎掘りも約1m前後の深さになるということであるため、出口氏と協議の結果、念のために基礎掘りの段階で立合調査を実施することになった。昭和50年2月7日より基礎掘りに入ったために補助員により立合調査をしていたところ、弥生土器が完形の状態で出土しているとの連絡が入り、現地を調査した結果、落ち込み状の遺構が少なくとも二カ所で認められ、良好な状態で土器が出土していた。この状態から立合のみの簡単な調査では、処理できないことは明らかであるため、出口氏及び工事施工の阪上建設株式会社との間で協議をすすめたが、工事日程との関係上あまり期間の余裕をもつことができず、結局4日間で調査を完了するという制限付の調査になってしまった。

調査は、東大阪市遺跡保護調査会の協力を得て、昭和50年2月14日より同年2月17日までの延4日間で実施し、井戸遺構2カ所とおびただしい量の弥生土器が出土した。

試掘調査では、今回の調査で発見した井戸遺構のすぐ横にトレンチを設定していたが、井戸遺構にかかわらず、弥生期の包含層も削平されており、井戸遺構そのものしか残っていなかったために確認できなかった。このことから、徹底的な試掘調査の必要性を痛感するとともに、遺構の保存が良かっただけに、調査期間が十分でなかったことが残念である。

調査の実施にあたっては、土地所有者の出口芳興氏及び、工事施工の阪上建設株式会社社長阪上正治氏には、困難な状況にあるにもかかわらず、大変お世話になった。また、東大阪市遺跡保護調査会の職員の方々には直接調査に従事していただいた。これらの方々には記してお礼申しあげます。

① 東大阪市教育委員会 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14「馬場川遺跡Ⅲ」1975年

II 位置と環境

馬場川遺跡は、大阪府と奈良県を西と東に分ける生駒山地の西麓、東大阪市の東南隅にあたる横小路町3丁目から4丁目に所在する縄文時代から古墳時代にまたがる複合遺跡である。遺跡の総面積は約75,000㎡と推定されている。今回、調査を実施した地点は、遺跡のほぼ中心部にあたる横小路町4丁目744番地である。馬場川遺跡は、一般に縄文時代晩期の集落址として広く知られているが、その上層には弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺物が広範囲かつ豊富に出土し、弥生時代から古墳時代の中河内地方の歴史を究明するための必要不可欠な遺跡となっている。

遺跡は、生駒山地のふもと北に鳴川谷、南に横小路谷という小さな谷川によって形成された小規模な扇状地の末端部、標高15～20mの間に位置している。扇状地の西方は、旧大和川水系によって形成された低湿な河内平野が一面に広がっている。この付近の山麓部は東大阪市の中部から八尾市にかけて、同じように生駒山地から流れ出た小規模な谷川により形成された扇状地が連続と続いて存在している。遺跡周辺は、東側に古くからある集落を除いて、つい最近まで水田や畑地として耕作されていたが、大阪市より流出した人口が周辺の隣接都市に流入するにしたがって、居住性のよい扇状地上に住宅地を求めるためか、比較的交通の不便な場所であるにもかかわらず住宅化の波が押しよせてきている。この結果、最近では遺跡の範囲内の約5割までが住宅地によって占められている。

周辺の集落址としては、馬場川遺跡と同様の扇状地上に立地するものと少し西方の扇状地末端に近い低湿地の中に立地するものの2つに大別できる。前者は、北7kmに所在する大東市の中垣内遺跡をはじめとして、北より標高15～20mの間につくられた旧東高野街道にほぼそって、1kmから2kmの間隔をおいて日下・芝ヶ丘・西ノ辻・鬼塚・縄手遺跡という順に点在している。また、後者の遺跡は、標高5m付近に存在する植附・鬼虎川・北鳥池・池島遺跡などがあげられる。これらの遺跡のうちで馬場川遺跡と同様、縄文時代に発生するものは、日下・芝ヶ丘・鬼塚・縄手遺跡という扇状地に立地する遺跡である。これは、縄文時代において現在の河内平野が河内潟と呼ばれる湖沼であったことに起因していると考えられる。

今回の調査で出土した、弥生時代から古墳時代にかけての遺物を出土する遺跡は、芝ヶ丘・西ノ辻・鬼塚・縄手・北鳥池・池島などである。これらの遺跡のうちで北鳥池・池島の両遺跡は、扇状地末端部に近い低湿地に営まれた集落址である。このように現在の河内平野の中に集落が営まれるようになるのは、弥生時代になり、かつての河内潟と呼ばれた湖沼が、旧大和川と呼ばれる大小の河川の沖積作用により、低湿地となり農耕に利用できるようになったことがその原因となっていると考えられる。この段階で低湿地に発生する集落は、大小の河川が形成した自然堤防上などに位置する。鬼虎川・北鳥池・池島遺跡は、いずれもこの例である。

周辺には集落遺跡のほかにも古墳も多く存在する。前期に逆のぼる古墳は知られていないが、



第1図 周辺図

中期の古墳として縄手遺跡内より上部が削平された状態で発見された円墳のえのき塚古墳や南1kmにある八尾市の心合寺山古墳などは、周濠をもった中期の典型的な前方後円墳である。後期にはいと生駒山から派生する尾根上に多くの古墳が築かれる。その代表例は、北1kmに存在する山畑古墳群で約60基の群集墳で構成されている。その他にも北500mにある五里山古墳群のように数基程度の小規模な群集墳が尾根上に点在している。

このように馬場川遺跡周辺の扇状地は、縄文時代から現代に至るまで人々が生活を営んできた場所であり、このことは今後中河内地方の歴史を究明する上で非常に重要な地域となることを示している。

Ⅲ 調査概要

今回、調査を行なった地点は調査前に畑地として利用されている所であった。調査のきっかけとなったのは、前述のように住宅新築に伴った立合い調査を実施中に弥生土器が出土したことによる。調査を実施した範囲は建築予定面積の74m×74mのほぼ正方形である。確認した遺構は、素掘りの井戸が2基である。その他の遺構はまったく確認できなかった。遺構のベースとなっている現地表下1m30cmの黄褐色砂質土にいたる層序は、上より耕土・床土・茶褐色砂質土・暗黒茶色土・暗茶褐色土の順である。遺物包含層としては、地表下80cmの暗黒茶色土層中より須恵器や後期の弥生土器などが少量出土した。この層は、東方よりの流れ込みによって形成されたと考えられる。また、井戸のベースである黄褐色砂質土直上でも少量の弥生土器が出土した。以下、発見された1号井戸と2号井戸に関していくらかの推測をまじえながら説明したい。

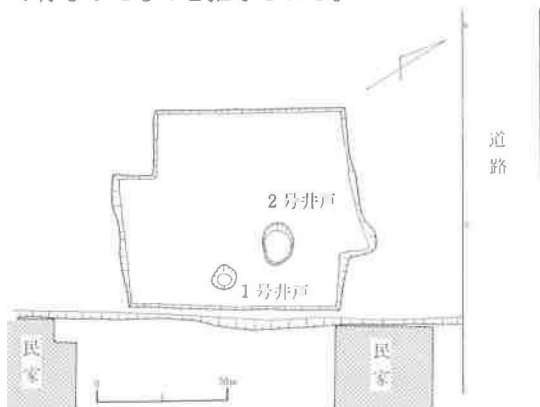
1号井戸 この井戸は、黄褐色砂質土層をベースに築かれ、上面は長軸1m90cm、短軸1m70cmのほぼだ円形を呈する。深さ約60cm、断面はU字形をなし底部は淡青灰色砂層にいたっている。淡青灰色砂層は、現在でも多量の水がわく湧水層である。この井戸は、上面に大型の壺(図版13最大腹径30cm)と、やや小型の壺(図版13最大腹径21.5cm)で底部近くに穿孔をもつものをすえ、その横に高杯1個(図29)を横たえた状態で発見された。すえられた2つの壺は、胴部中央より上が欠失していた。これらの土器のほぼ直下より器台および甕2個が発見された。甕は底部がとがり気味の丸底のもの(図62)と外面にタタキを施し平底のやや大型のもの(図63)が伏せておかれていた。その横に器台(図28)が倒れた状態で発見された。これらの土器が発見されたレベルより下の堆積土中には、わずかに土器の小片が数点発見されたにすぎない。

井戸内部の堆積土は、さほど複雑な様子を示さない。まず井戸が掘られた後、使用中に起ったと思われる壁面の崩壊によって形成された淡黒褐色砂質土ないし黒褐色砂質土が、壁面に沿って堆積する。その後、暗黒褐色粘質土が一挙に堆積している。これは、井戸が素掘りであったため壁面の崩壊が起り、それが原因で井戸が使用不能あるいは、それに近い状態になったと思われる。それゆえ、暗黒褐色粘質土を埋め土として用い一挙に井戸を埋めたものと考えられる。そして、この廃絶に伴って、井戸に対する供献を行なったとみえ、上面の中央部において上下2回にわたって壺、高杯と甕、器台を完形のまますえた状態でおいていた。なお、2個づつ置かれた壺、甕のうち小型の壺と甕が底部近くに穿孔をもっていた。上下2回にわたって行なわれた供献の時間差は、その出土状況から見て、さほどの隔たりがなかったものと推定される。

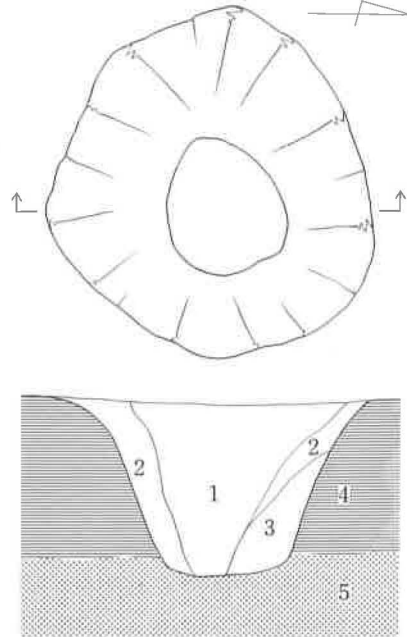
2号井戸 1号井戸と同じく黄褐色砂質土層をベースにして築かれた素掘りの井戸で、上面の形は長軸3.1m、短軸2.4mのだ円形である。深さは約1.3mで、断面はU字形を呈している。底部もまた、1号井戸同様湧水層である青灰色砂層にいたっている。この井戸の上面に、底部近くに穿孔をもった長頸壺(図1)が倒立し、外面にタタキを持つ平底の甕が2個(図48、64)横たわ

った状態で発見された。この面より下を掘り下げたところ中央部を中心に多量の土器片が出土した。この土器片は、あらゆる器種を含み、完形に近いものも多く存在した。この面より下へ掘り進むと暗青灰色砂質土があらわれ、土器の出土量は極端に減少した。さらに下へ掘り下げた所、暗青灰色粘質土層にいたった。この層の上部より完形の壺1（図2）がやや斜めにかたむいた状態で発見された。この層が2号井戸で最も厚い堆積土となっており、下層は湧水層である淡青灰色砂層になる。この層からの湧水がはげしいため、井戸全体に底部まで掘り下げることが困難であった。

この井戸の堆積土の層序をみると、井戸が掘られた後に最初に暗青灰色粘質土が堆積する。ついで暗青灰色砂質土が堆積する。この時期に井戸としての機能が廃絶するようである。この後、破損した土器の投棄場として利用される。暗茶褐色砂質土、暗黒褐色粘質土の2層は、この段階で堆積したと考えられる。この時に井戸は、完全に埋没したのであろう。しかし、井戸廃絶に伴って行なったと思われる供献の際に、井戸中央部付近を掘り窪め長頸壺1個、甕2個を置いたものと考えられる。したがってこの井戸に対する供献は掘削時に1回、廃絶後に1回の計2回壺、甕などを用いて行なったものと推察される。

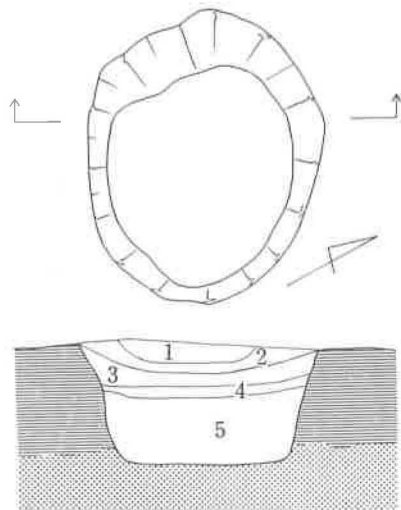


第4図 調査地点平面図



第2図 1号井戸実測図

1. 暗黒褐色粘質土
2. 黒褐色砂質土
3. 淡黒褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 淡青灰色砂



第3図 2号井戸実測図

1. 黒褐色粘質土
2. 暗黒褐色粘質土
3. 暗茶褐色砂質土
4. 暗青灰色砂質土
5. 暗青灰色粘質土

IV 出土遺物

1. 概観

2基の井戸遺構から出土した遺物は土器、土製品からなる。土器は、第V様式を構成する基本的な器種である甕、広口壺、長頸壺、高杯、鉢に手焙形土器が加わり、さらに第V様式以降に盛行すると考えられる一群の土器を伴っている。これらは素掘りの井戸遺構内に投棄あるいは置かれた状況で混在することから、遺物は比較的短期間のうちに堆積したものとして扱われる。ここでは前者をⅠ類、後者をⅡ類と大別して概観したい。

I 類

広口壺 (12)~(13)、(23)~(26)

(a) (12)~(13) 短い円筒形の頸部から外反する口縁部が付き、口縁端部を下方に拡張して施文帯とするものである。口縁端部への施文は、ヘラ描き沈線文+ヘラ先による刺突文に竹管を押圧した円形浮文を貼るもの(12)と、櫛描き波状文+竹管押圧文をもつもの(13)とがある。また、ヘラ描き沈線文と円形浮文をもつ大形壺の口縁片もみられる。

(b) (23)~(26) 短い円筒形の頸部から外反する口縁部が付き、口縁端部は下方にやや拡張するもの(23)、そのまま面となっておわるもの(24)~(25)、つまみあげ気味にヨコナデした「受口状」の口縁が付くもの(26)などがみられる。いずれも施文帯とはならない無文の広口壺である。(23)にはヘラ記号がみられ、(23)~(24)には煤が付着している。

長頸壺 (1)~(11)

(a) (2) 円筒形の頸部に外反する口縁部が付き、口縁端部を下方に拡張して施文帯とするものである。口縁端部への施文は、櫛描き波状文+竹管を押圧した円形浮文をみる。器高35cmをはかる大形の長頸壺で、胴部にはカゴ目が認められる。

(b) (1) 円筒形の頸部に外反する口縁部が付き、端部はそのまま面となっておわるものである。長頸壺(2)の施文帯を除いた器形と類似する。

(c) (3)~(6) 外上方にのびる直口の口縁部が付くもの(3)~(4)、口縁端部をつまみあげ気味にヨコナデした「受口状」口縁が付くものなど、比較的小形の長頸壺である。胴部に叩き目がみられるもの(6)もある。

(d) (7)~(9) 器高10cm前後のミニチュア長頸壺である。いずれも丁寧に作られたもので明褐色に焼きあがっている。

(e) (10)~(11) 細い筒状の頸部に、腰部が張り出した玉ねぎ形の胴部を有するものである。口縁端部はつまみあげ気味にヨコナデした「受口状」口縁となっている。

直口壺 (16)

球形・平底の胴部に、外上方にひらく短い口縁部が付くもので、口縁端部は薄くおわる。

高杯 (17)~(18)

(a) (17) 斜上方にのびる杯体部より、角度をかえて短く外反する口縁部が付く浅い杯部をもつもの。脚部は中空である。

(b) (18) 斜上方にのびる杯体部より、角度をかえて長く外反する口縁部が付く深い杯部をもつもの。この種の杯部は破片でみられ、完形の(18)では直立ぎみの口縁が付く。中実の脚をもつ。

器台 (19)

粘土紐を輪積みした円筒部より上・下にそれぞれ外反する器形である。口縁端部は欠失するために施文を行なうものかどうかは不明。

甕 (41)~(57)、(63)~(65)

(a) 「く」の字に外反する口縁部をもつものである。口縁端部は、そのまま面となっておわるもの(48)~(49)、(65)。「受口状」口縁と同様に外側に面をもつが上方には突出しないもの(45)~(46)、(63)、薄くなってやや反転ぎみにおわるもの(50)~(53)、内湾ぎみに丸くなっておわるもの(54)、(55)、(64)など種々の形態がみられる。口縁部の成形には、胴部上縁で接合するもの(48)、(45)、(52)、(54)と、胴部から口縁下半部までが連続し、口縁上半部を継ぎ足すもの(50)、(55)、(64)、(65)や胴上部を折り返して口縁を作り出すもの(46)、(49)、(51)とがあり、後者には口縁外面に接合痕や叩き目が残っている。

(b) 「受口状」口縁をもつものである。口縁端部に平坦面あるいは内傾面を有する口径20cm以上の大形の甕、(57)と、口縁部をつまみあげ気味にヨコナデするため上端が稜となるもの(41)~(44)、(47)とがある。口縁部の成形方法は、大形の(56)、(57)と(43)、(44)は胴上縁で接合し、(42)、(47)は口縁下半部までが胴部と連続するものである。

鉢 (67)~(78)

(a) (77) 「く」の字に外反する口縁部が付き、口縁直下に半円形の把手を有する大形の鉢である。

(b) (78) 口縁端部がつまみあげ気味のヨコナデによって「受口状」口縁となり、腰部がわずかに外に張る大形の鉢である。

(c) (67) 口縁端部が上方に立ち、上端に狭い面をもつ「受口状」口縁の中形鉢である。体部外面には叩き目がみられる。

(d) (68)~(76) 甕の下半部と共通する器形の小型鉢である。体部には叩き目を施すもののほかに、叩き技法を使用せずに仕上げたために粘土紐の接合痕がそのまま残るもの(70)、刷毛目あるいはナデによって粘土紐の接合痕を調整したもの(68)~(69)、(75)~(76)などがある。

手焙形土器 (66)

ドーム状の覆いは欠失するが、体部の開口部分と凸帯部分から推定復原したものである。開口部分の口縁は、つまみあげ気味のヨコナデによって上端に稜をもつ。

II 類

2 重口縁の壺 (27)、(33)、(34)

球形、平底の胴部に直立する頸部から外反したのち、角度をかえて再び外反する口縁部が付くものである。口縁部の内外に櫛描き波状文、直線文の施文をみることが特徴となる。口縁端部はつまみあげ気味のヨコナデによって「受口状」となるもの(27)、丸くなっておわるもの(33)、(34)がある。

加飾する高杯、器台 (28)、(29)

2 重口縁の壺口縁部と同様の形態をなす杯部が付き、内外に櫛描き波状文をめぐらすものである。脚部は杯部を逆にふせた恰好の裾部が付くもの(28)と、中実の脚柱部から角度をかえて裾部が広がるもの(29)とがある。(28)は、中実の脚柱部に径0.8cmの貫通孔を上、下から穿っていることと、杯部に5方向の透しを有することから一応器台としたが、口縁内面を波状文で飾る特徴からはI類の器台のように上に壺を載せて使用するものかどうか疑問である。

有段杯部の小型高杯 (30)

水平方向にのびる杯底部から角度をかえて口縁部が立つ有段の杯部に、短い脚柱部から大きく広がる裾部が付くものである。杯部内外には放射状の暗文が顕著である。

碗状杯部の小型高杯 (35)~(40)

浅い碗状の杯部に、短い脚柱部から大きく広がる裾部が付くものである。杯内部には放射状の暗文がみられる。色調には褐色系のもの(36)、(39)と、淡赤褐色を呈するもの(35)、(37)、(38)、(40)とがある。

布留式に続く高杯 (31)、(32)

水平方向にのびる短い杯底部より口縁部が大きく外反する杯部をもつ。脚柱部は中空である。いずれも淡赤褐色の色調を呈し、器表面にはスリップ状のナデと放射状の暗文が認められる。

胴内面を削る甕 (58)~(62)

(a) (59)、(62) 「く」の字口縁をもち、胴部内面をヘラ削りする甕である。(59)は口縁端部が薄くなっておわるものである。(62)は倒卵形の胴部に尖り底をもつもので、器厚0.2~0.3cmと薄い。また、口縁外面に接合痕をみること、胴部には叩き目を残さないこと、底部の中心から半径5cmの円形黒斑をみること、褐色を呈し金雲母、角閃石を含むことなどが特徴となる。とくに、底部の黒斑は尖り底の器体を直立させた状態で焼成する際に生じたものかと思われ、この土器が平底の土器の焼成方法と大差ない方法で焼かれたことがわかる。

(b) (58)、(60)、(61) いずれも口縁端部をつまみあげ気味にヨコナデした「受口状」口縁をもち、胴部内面をヘラ削りしたものである。(60)、(61)は球形に近い胴部に、わずかに平らな面を残すだけの尖り底をもつもので、器厚0.3~0.4cmと薄い。内面の削りは、(62)にくらべて丁寧である。口縁部は外面に叩き目が残るところから胴部と連続するものとみられる。(60)、(61)は淡赤褐色を呈し、砂をあまり含まない胎土を使用しているが、(58)は暗褐色の色調に金雲母、角閃石を多く含む胎土を使用している。

以上のI、II類に大別したものの他に、脚台(80)、(81)、異形土器(14)、土製勾玉(15)などがある。

2. 観察結果

I 類

長頸壺

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
1	口径13.8 器高23.4	口頸部 円筒形の頸部に外反する口縁部が付く。口縁端部はそのまま面となっておわる。口縁部内面はヨコヘラミガキ。頸部は内外面とも横方向の刷毛目(8本/cm)+タテヘラミガキ。 胴部 器体中位よりやや下に最大径部を有する。胴部外面に半截竹管文を3個1対施す。外面は斜方向の刷毛目(8本/cm)+タテヘラミガキ。内面は、上半部が左回りの刷毛目(6本/cm)、下半部は下から上への刷毛目。 底部 しっかりした平底。内底面に左回りの断続的な刷毛目。	○明褐色 ○金雲母・角閃石を含む胎土。器表面は磨きが顕著。 ○胴部下半に2cm×1.8cmの円孔・反対側に2.4cm×0.8cmのダ円孔あり。いずれも焼成後穿孔
2	口径18.4 器高35.4	口頸部 円筒形の頸部に外反する口縁部が付く。口縁端部を下方に拡張して施文帯とする。文様は櫛描き波状文(6本/cm)+竹管を押圧した3個1対の円形浮文。外面は斜方向の刷毛目(7本/cm)+タテヘラミガキ。内面は左回りの刷毛目。 胴部 口頸部からなだらかに移行し、器体中位に最大径部を有する。外面は横ないし斜方向の刷毛目+タテヘラミガキ、内面は横方向に刷毛目を一部に施すが接合痕、指圧痕が認められる。 底部 しっかりした平底。外底面は中窪み。内底面に左回りの断続的な刷毛目。	○褐色 ○金雲母・角閃石を含む胎土。器表面は磨きが顕著。 ○胴部外面に煤の付着がみられるが2次焼成は受けていない。胴部外面に籠目(幅0.7cm)が認められる。
5	口径11.2 器高21	口頸部 わずかに外に開く口頸部。口縁部は内湾ぎみに立つ。外面は下から上への刷毛目(6本/cm)、内面はナデ調整。胴部との接合部内面に右回りの刷毛目。胴部との接合はかなり乾燥した段階で行なったために接合部分ではずれて、胴部上端は擬口縁となる。 胴部 器体中位に最大径部を有する。外面は下から上への刷毛目。接合部付近はナデののち右回りの刷毛目で調整する。内面は指ナデによる。 底部 小さな平底。外底面は中窪み。内底面に右回りの断続的な刷毛目。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む胎土。器表面は平滑。
6	口径10.6 器高20.4	口頸部 わずかに外に開く口頸部。口縁端部は内湾ぎみに立つ。外面は下から上への刷毛目(6本/cm)、内面は右回りの刷毛目。 胴部 器体中位よりやや下に最大径部を有する。外面には条痕の細い叩きが散漫(3条/cm)とつく。叩き目は器体下半の接合痕を境に、上は水平方向、下は右上りに施す。内面はナデ調整。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石、0.1~0.5cmの石粒を多く含む。 ○叩き目の条痕内に赤色顔料が残る。
3	口径10.2 器高17.8	口頸部 わずかに外に開く直口の口頸部。口縁端部は丸くなっておわる。外面はタテヘラミガキ。磨きの痕跡はやや不明瞭。内面は胴部との接合部付近を右回りの刷毛目(10本/cm)、その他はナデ調整。 胴部 器体中位に最大径部を有する。外面は縦方向の刷毛目+上半部のみタテヘラミガキ。ヘラミガキは接合痕を消すべく開始されている。内面も接合痕を境に上半部は指圧痕+右回りの刷毛目、下半部は下から上への刷毛目調整。 底部 しっかりした平底。外底面は中窪み。内底面は右回りの断続的な刷毛目。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。 ○褐色
4	口径10.2	口頸部 外開きの直口の口頸部。口縁端部は丸くなっておわる。内外面ともにタテヘラミガキ。磨きの痕跡はやや不明瞭。 胴部 口頸部との接合部が細くしまる球形の器体。中位に最大径部を有する。外面は接合痕を消すべく行なわれるタテヘラミガキ、内面は接合痕を境に上半部は指圧痕+右回りの刷毛目(10本/cm)、下半部はナデ調整。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。
7	口径7.6 器高13.2	口頸部 わずかに外開きでのび、口縁端部はヨコナデによって「受口状」に仕上げる。端部外面には擬凹線が2条付く。外面はタテヘラミガキ。内面は胴部との接合部付近に右回りの刷毛目(7本/cm)、その他はナデ調整。 胴部 器体の上から下程のところを最大径部を有する。外面のヘラミガキは3段階にわかれ、器体上位と下位を縦方向に、中位は横方向に磨いている。内面は指圧痕+乱方向の刷毛目。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。

番号	法量 (cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
7		底部 胴部と明瞭な境をもたず、平坦な面を作って底部としている。	
8	口径 7.8 器高 11.6	口頸部 わずかに外開きでのび、口縁端部をつまみ上げることによって「受口状」に仕上げる。外面はタテヘラミガキ。内面は胴部との接合部付近に右回りの刷毛目(6本/cm)を施し、そのうえに散漫なタテヘラミガキをかける。 胴部 器体中位に最大径部を有する。外面はタテヘラミガキ、内面は指圧痕+右回りの刷毛目。全体に器厚4~5mmの薄手の土器である。 底部 小さな平底	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。
9	口径 7.2 器高 10.2	口頸部 わずかに外に開く口頸部。口縁端部は丸くなっておわる。外面は胴部との境に縦方向の刷毛目(10本/cm)、その他はナデ調整。 胴部 器体の上から下程のところを最大径部を有する。外面は縦方向の刷毛目+ナデ調整。 底部 外面に叩き目をもつ平底。外底面は中窪み、内底面は右回りの断続的な調整痕。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。
10	口径 6.3	口頸部 細長い円筒形の口頸部、口縁端部はつまみあげ気味にヨコナデして「受口状」に仕上げる。端部外面には擬凹線が一条付く。外面はタテヘラミガキ、内面ナデ調整。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。
11		胴部 器体中位よりやや下に最大径部を有する玉ねぎ形の器形。外面のヘラミガキは3段階にわかれ、器体上位と下位を縦方向に、中位は横方向に磨いている。内面は器体中位よりやや下の接合痕を境として、上半は斜方向の刷毛目(9本/cm)、下半は下から上への刷毛目。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。

広口壺

番号	法量 (cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
12	口径 18.6	口頸部 直立する頸部に、ゆるやかに外反する口縁部が付く。口縁端部は下方に粘土を補充して拡張し、外面を施文帯としている。文様はヘラ沈線文+2重の竹管文を押しした円形浮文+ヘラ先刺突文。外面はタテヘラミガキ。内面のヘラミガキは口縁部縦方向、頸部横方向。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。
13	口径 16.6	口頸部 直立する頸部に、角度をかえて外反する口縁部が付く。口縁端部は下方に拡張して外面を施文帯としている。文様は竹管文+櫛描き波状文(6本/cm)。外面タテヘラミガキ、内面ヨコヘラミガキ。内面の胴部との接合部付近は右回りの刷毛目(8本/cm)が残る。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。
23	口径 15.2 器高 25.6	口頸部 直立する頸部に、ゆるやかに外反する口縁部が付く。口縁端部は下方にわずかに拡張する。端面は無文。頸部の内外面には散漫なタテヘラミガキがみられる。 胴部 器体中位よりやや上に最大径部を有する肩の張った器形。外面は最大径部を境として上半部縦方向、下半部横方向の刷毛目(9本/cm)+タテヘラミガキ。内面は上半部指圧痕+左回りの刷毛目、下半部は乱方向の刷毛目。 底部 不安定な平底。外底面は中窪み。内底面は左回りの断続的な刷毛目。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。 ○肩部以下の外面に煤付着。
24	口径 15.6	口頸部 直立する頸部に、ゆるやかに外反する口縁部が付く。口縁部は拡張せず、そのまま面をもっておわる。外面縦方向、内面横方向のヘラミガキ。頸部と胴部の接合部に左回りの刷毛目(8本/cm)。 胴部 器体中位に最大径部を有する扁平な胴部。肩部の接合痕を境に内面の刷毛目は原体を異にする。上半部は頸部と同一原体、下半部は目の粗いもの(5本/cm)をいずれも左回りに施す。外面のヘラミガキも肩部では接合痕を消すべく横方向に丁寧に磨いている。器体中位以下は煤付着のため調整手法は観察できない。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面の磨きは顕著。 ○口縁部外面と胴部中位以下の全体に煤付着。 ○胴部外面にヘラ記号文あり。
25	口径 13.2 器高 22	口頸部 直立する頸部に、角度をかえて外反する口縁部が付く。口縁端部はつまみあげ気味にヨコナデして「受口状」に仕上げる。 胴部 器体中位に最大径部を有する。最大径部に接合痕。外面は下半部を下か	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。

番号	法量 (cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
25		ら上への刷毛目(7本/cm)、接合部では斜方向の刷毛目を再度行なう。上半部はヘラミガキ。磨き痕は不明瞭である。内面は指圧痕+ナデ調整。不安定な平底。内底面に左回りの断続的な調整痕。	
26	口径13.4 (復原径)	口頸部 直立する頸部に、外反する口縁部が付く。口縁端部はつまみあげ気味にヨコナデして「受口状」に仕上げる。頸部外面に上から下への目の粗い刷毛目(4本/cm)。 胴部 大きく肩が張る器形。口頸部とは乾燥がかなり進んだ段階で接合しており、胴部上縁の接合面は刷毛目が残る擬口縁となる。胴部外面の刷毛目は口頸部を接合する以前に行なわれたもので、接合後に頸部から胴部上位にかけて再度の刷毛目調整が行なわれている。内面は指圧痕+ナデ調整。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。

直口壺

番号	法量 (cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
16	口径12.2 器高18.2	口頸部 外上方に開く直口の口頸部。口縁端部は器厚が薄くなってわずかに外反する。内面には右回りの刷毛目(6本/cm)。 胴部 器体中位に最大径部を有する球形の胴部。最大径部に接合痕があり、外面の刷毛目はこれを境に原体を異にする。上半は上から下への刷毛目(6本/cm)、下半は下から上への刷毛目(7本/cm)。内面は接合痕を境に刷毛目の方向が異なる。原体はいずれも(9本/cm)のものを使用する。 底部 小さな平底。内底面は右回りの断続的な刷毛目。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。 ○外面下半に煤付着。

高杯

番号	法量 (cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
17	口径22.2 器高15	杯部 斜上方にのびる杯体部から角度をかえて短く外反する口縁部が付く。口縁部と体部の境には外面に稜、内面に段をもつ。口縁端部はそのまま面となっておわる。外面は口縁部から底部まで放射状のヘラミガキ、内面は口縁部横方向、体部放射状のヘラミガキ。内底面は脚部上端面を利用する。 脚部 中空の脚柱部からなだらかに裾部へと移行する。杯部とは別々に作った後接合。外面は縦方向の刷毛目(11本/cm)+タテヘラミガキ、内面はしぼり痕+刷毛目。裾内面は再度ナデ調整。裾端部は丸くなっておわる。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。杯部器表面は磨きが顕著。
18	口径22.3 器高18	杯部 斜上方にのびる杯体部から角度をかえて直立ぎみの口縁部が付く深い杯部。口縁部と体部の境には外面に稜、内面に段をもつ。口縁端部は外反ぎみに面をもっておわる。体部と口縁部とは接合部で剝離しており、体部の剝離面は擬口縁をなす。外面は口縁部体部それぞれにタテヘラミガキを施し、内面は口縁部斜方向、体部放射状のヘラミガキを施す。内底面は磨きかけた粘土が剝離して脚部上端面がみえている。 脚部 中実の脚柱部。杯部とは別々に作った後接合。杯底部外面には補強のための粘土を補充する。裾部へはなだらかに移行し、裾端部は丸く、上端に粘土のはみ出しがみられる。外面は縦方向の刷毛目(10本/cm)+タテヘラミガキ。内面は刷毛目+ナデ調整。裾部に径1.4cmの円孔が4方向に穿孔されている。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。
20		脚部 中空の細長い脚柱部。杯部と組み合わせる方法は、杯底部の凸部を挿入して結合するものか。脚柱上部外面には杯部との接合面を補強する粘土の剝離痕がみられる。外面タテヘラミガキ、内面ヘラ削り。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面平滑。
21		脚部 中空の脚柱部。ゆるやかに裾部へ移行する。脚柱は上端まで中空で、杯内底面に円板充填がみられる。脚部から杯部にかけての成形は、比較的乾燥が進まない段階で杯部粘土を積み上げた連続成形法に近い製作法をとったものと思われる。外面タテヘラミガキ、内面はしぼり痕+ヘラ削り。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。
22		脚部 中実の脚柱部。脚柱上端にはヘラミガキがみられることから杯部内底面として利用されたことがわかる。外面には杯部の剝離痕がみられ、杯部とは乾燥がかなり進んだ段階で接合し、ヘラミガキを行なったものと思	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
22		定される。外面は細筋(幅1.5mm)のタテヘラミガキ、内面は指成形。3方向に径約1cmの円孔が穿たれている。	

器台

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
19		体部 粘土紐を輪積みした円筒形の体部より上下にそれぞれ外反する口縁部ならびに裾部が付く。口縁端部は欠失するが、端部を下方に拡張した施文帯をもつものかもしれない。筒状部内面は指成形、口縁部内面と外面はいずれもタテヘラミガキ。筒状部の上位、中位、下位にそれぞれ径約1cmの円孔が3~4方向に穿たれている。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きか顕著。

甕

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
48	口径15.4 器高23.2	口縁部 「く」の字に外折し、口縁端部は面をもつ。 胴部 器体の上から5程のところに最大径部を有する。器体中位よりやや下に接合痕があり、この部分は叩き目が消えて右回りの刷毛目(8本/cm)調整がみられる。しかし、これを境とした叩き目の主軸方向の変化はほとんど認められないことから、接合後に器体全体を連続して叩いたものともみれる。叩き目は太筋の条を有するもの(2.5条/cm)を使用。内面は接合痕以下を乱方向の刷毛目、接合痕直下から上は接合痕を消すべく下から上へ掻き上げている。 底部 しっかりした平底。内底面に左回りの断続的な刷毛目。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.5cmの石粒が器表面にみられる。 ○胴部の一部に煤付着。
49	口径16.8 器高23.4	口縁部 「く」の字に外折し、口縁端部は面をもつ。外面に叩き目しほり痕をみる。内面に左回りの刷毛目。 胴部 器体中位に最大径部を有する。最大径部に接合痕があり、その上下3cm程のところにもそれぞれ接合痕がみられる。これらの接合部分は、はみ出した粘土をナデつけ、さらにその上を縦方向に刷毛目(7本/cm)調整するため叩き目(3.5条/cm)は消えている。内面は器体下位の接合痕を境として、下半は左回りの刷毛目(6本/cm)、上半は左回りの刷毛目を施すが粘土紐の痕をよく残す。 底部 扁平な平底。外面および内底面に指成形痕。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.2cmの石粒が器表面にみられる。
65	口径16 器高27.4	口縁部 外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。外面は接合痕と叩き目+指成形痕。内面は左回りの刷毛目(9本/cm)。 胴部 器体の下から5程のところに最大径部を有する下ぶくれの器形。外面は器体上位の一部に目の粗い叩き目(2.5条/cm)、その他の大部分は乱方向にヘラで掻いている。これは故意に叩き目を消したためのものではない。肩部以下を接合する際にはみ出した粘土をなで回しているうちに消えたものと思われる。内面は最大径部の接合痕以下が目の細かい刷毛目(12本/cm)が丁寧にこなわれ、肩部の接合痕以下を粗くヘラで掻き削る。肩部以上はナデ調整。底部は欠失するが、器形からみて小平底か丸底に近い窪み底であろう。全体に0.8~1cmと厚手。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.5cmの石粒が器表面にみられ、器表面の凸凹は激しい。 ○器体中位以下に煤付着。2次焼成による剝離あり。
50	口径15.5 (復原径)	口縁部 外反する口縁部。口縁端部は器厚がしだいに薄くなり、反転きみにおわる。外面に接合痕。接合痕以下に叩き目しほり痕。 胴部 張りをもつ器形。外面は叩き目(3条/cm)十上から下への刷毛目(8本/cm)、内面は左回りの刷毛目。胴部と口縁部の境界は明瞭な稜をもたない。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。
51	口径10 器高11.4	口縁部 短く外反する口縁部。口縁端部は器厚がしだいに薄くなり、丸くなっておわる。 胴部 器体の上から5程のところに最大径部を有する。内外面ともに掻き削り+ナデ調整。 底部 しっかりした平底。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.3cmの石粒が器表面にみられる。
52	口径12.8 (復原径)	口縁部 外反する口縁部、口縁端部は器厚がしだいに薄くなり、丸くなっておわる。 胴部 内面に斜方向の刷毛目(9本/cm)。器厚0.3cmと薄い。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。
53	口径15.6 (復原径)	口縁部 「く」の字に外反する口縁部。口縁端部は器厚が薄くなって丸くおわる。端部外面に凹線状のヨコナデ。胴部内面にヘラ削りは認められないが器厚0.4cmと薄い。	○淡赤褐色 ○金雲母、角閃石の微粒を含む。器表面は平滑。

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
41	口径16.4 器高17.6	口縁部 外折したのち、口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は丸く、外面は凹線状のヨコナデ。 胴部 器体の上から5程のところに最大径部を有する。最大径は口径と同大、器体中位に接合痕を有し、これを境に叩き目の主軸方向が異なる。上半は水平方向のもの、下半は右上りのものを使用。原体は同一で太筋のもの(2.5~3条/cm)を使用。内面は全体に右下から左上への刷毛目(8本/cm)で調整する。 底部 外面に粘土のはみ出しがみられる不安定な平底。内底面は下から上へ放射状に掻く。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.3cmの石粒が器表面にみられる。
42	口径14.2 器高15.5	口縁部 外折したのち、口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は丸く、外面に凹線状のヨコナデを施す。胴部から折り返した部分には接合痕と、叩き目十しぼり痕。 胴部 器体中位よりやや上に最大径部を有する球形に近い器形。口縁部との境界は明瞭な稜をもたない。最大径部とそれより4cm程下に接合痕があり叩き目の主軸方向が異なる。上位は若干右上り、中位は水平方向、下位は右上り。原体はいずれも太筋のもの(2.5条/cm)を使用。器体下位の接合部では接合後に縦方向の叩き目(3条/cm)を施している。内面は器体下位に左回りの刷毛目(8本/cm)が付き、接合部以上は刷毛目原体によって左回りに掻き削る。 底部 しっかりした平底。外面下端にまで叩き目をみる。外底面は中窪み、内底面は左回りの断続的な刷毛目。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面に石粒は目立たない。 ○器体下位の接合部以下に煤付着。
43	口径14.6 (復原径)	口縁部 外折したのち口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は稜をもち、外面に凹線状のヨコナデを施す。 胴部 器体中位よりやや上に最大径部を有し、丸みをもった器形。器体中位よりやや下に接合痕があり、これを境に叩き目の主軸方向が異なる。原体は上半部が太筋のもの(2.5条/cm)、下半部は不明瞭。内面は全体に右下から左上に掻いたのちナデ調整で器面を平滑にする。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面に石粒は目立たない。 ○肩部以下に煤付着。最大径部以下2次焼成による器面剝離。
図 版 10	口径14.9 (復原径) 器高19	口縁部 外折したのち口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は鈍い稜をもち、外面に凹線状のヨコナデを施す。胴部との境界が接合部。 胴部 器体中位よりやや上に最大径部を有する。器体中位よりやや下に明瞭な接合痕があり、これを境に叩き目の主軸方向が異なる。上半部はやや右上りないしは水平方向、下半部は顕著な右上り。原体に差はみられず太筋のもの(3条/cm)を使用。内面は全体に右下から左上へ刷毛目原体(4本/cm)によって掻く。 底部 底面を欠失するが明瞭な平底となる。外面下端まで叩き目をみる。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.2cmの石粒が器表面にみられる。 ○器体中位に2次焼成の痕がみられる。
44	口径16 (復原径)	口縁部 外折したのち口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は狭い面をもち、外面に凹線状のヨコナデを施す。胴部との境界は明瞭な稜をもたない。 胴部 口縁部との境は、外面の叩き目がヨコナデによって完全に消されている。内面は刷毛目によるが器厚0.4cmと薄い。	○灰褐色 ○角閃石が目立つ。器表面に石粒は目立たない。 ○胴外面に煤、内面にふきこぼれをみる。
45	口径15.8 器高19.3	口縁部 外反する口縁部。口縁端部はヨコナデによって外側に面を作り上端に稜をもつ。内面の胴部との境界は明瞭な稜とならない。 胴部 器体の上から5程のところに最大径部を有する。器体中位よりやや下に接合痕があり、これより上は右上りの太筋の叩き目(2.5条/cm)、下は叩き目が不明瞭。これは故意に消したものではない。内面は左回りに掻いた後ナデ調整。 底部 しっかりした平底。外面に指圧痕をみる。外底面は中窪み、内底面は掻取った後ナデ調整。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前後の石粒が器表面にみられる。 ○外面全体に煤付着。外面下手は2次焼成によって赤褐色を呈す。
46	口径12.8 器高14.8	口縁部 外反する口縁部。口縁端部はヨコナデによって外側に面を作り上端に鈍い稜をもつ。外面に叩き目十しぼり痕。 胴部 最大径部が外側へそれ程張らない器形。口径>胴部最大径。器体中位よりやや下に接合部があり、この周辺は接合の際になで回すため叩き目が消えている。叩き目は上半部が太筋の原体(2.5条/cm)を使用する。下半部の叩き目はこれよりやや細くみえる。内面は全体を掻いた後ナデ調整。 底部 底面は欠失するが明瞭な平底となる。外面下端にまで叩き目をみる。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前後の石粒が器表面にみられる。 ○器体中位以下に煤付着。
63	口径17.6 器高30.4	口縁部 外反する口縁部。口縁端部はヨコナデによって外側に面を作り上端に鈍い稜をもつ。内面の胴部との境界は明瞭な稜とならない。 胴部 器体の上から5程のところに最大径部を有し、外側に張りをもった器形。	○淡褐色、一部褐色。

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
63		器体下位に接合部があり、これを境に叩き目の主軸方向も異なる。叩き目は胴部の上から接合部まで右上りの同じ主軸で連続して叩いたと思われる太筋のもの(2.5条/cm)、接合部以下はこれより顕著な右上り。原体は同一。接合部には縦方向の叩き目が接合部の調整のために行なわれており、同様の叩き目は最大径部や底部近くの粘土帯接合部にもみられる。肩部の叩き目は上から下への刷毛目(8本/cm)によって調整されているが、叩き目の上をゆるく掻いただけのものである。内面は接合部以下に左回りの刷毛目(8本/cm)、接合部以上は左回りに掻き削っており、砂粒の動きがみられる。 底部 しっかりした平底。内面は指ナデする。	○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.3cmの石粒が器表面にみられる。 ○最大径部以下の外面に煤付着。内面下半にこげつきあり。
47	口径13.2	口縁部 外折したのち内湾ぎみに立つ。口縁端部は未調整。外面に接合痕と叩き目十しぼり痕あり。接合痕の上に継ぎたした粘土を内外面からの指圧によってつまみ上げて内湾ぎみに立つ。これに内外からヨコナデを加えれば「受口状」となるものである。 胴部 下半を欠失する。最大径は口径とほぼ同大。外面に水平方向の太筋の叩き目(2.5条/cm)。最大径よりやや下の接合部を境として右上りに主軸方向が変化する。内面は右下から左上へ掻いた後ナデ調整。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前の石粒が器表面にみられる。 ○外面全体に煤付着。
54	口径17.8 (復原径)	口縁部 外折したのち内湾ぎみに外上方へのびる。口縁端部は器厚が薄くなり、丸くおわる。口縁部は内外面ともに刷毛目原体(5本/cm)によるナデ調整。胴部との接合部外面には縦方向の刷毛目。	○褐色。 ○金雲母、角閃石を含む。器表面スリップの淡褐色の膜あり。
55	口径15.4 (復原径)	口縁部 外反したのち内湾ぎみに立つ。口縁端部は丸い。外面に接合痕。接合痕以下の叩き目十しぼり痕はヨコナデによって消す。接合痕以上は継ぎたした粘土を若干つまみ上げてこれをヨコナデして「受口状」に近い形態に仕上げる。胴部との境界は明瞭な接合をもたない。胴部外面に太筋の叩き目(2.5条/cm)。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。 ○外面に煤付着。
64	口径16.5 器高21.1	口縁部 外反したのち内湾ぎみに外上方へのびる。外面に接合痕。接合痕以下に叩き目十しぼり痕。接合痕より以上に粘土を継ぎたす。 胴部 器体中位に最大径部を有する。器体は最大径部が大きく外側に張り出したソロバン玉形。最大径部に明瞭な接合痕。接合痕以上は右上りで主軸方向が連続するやや細筋の叩き目(3.5条/cm)。最大径部以下は器体下位にもう一条の明瞭な接合痕がみられ、叩き目の主軸方向もこれを境に上は水平方向、下は右上りに変化する。これらの接合部分は接合後下から上への刷毛目(7本/cm)で調整する。内面は最大径部の接合痕以下を残りの刷毛目、接合痕以上は掻いた後ナデ調整するが粘土紐の継ぎ目が残る。 底部 わずかな平坦面を有するだけの底部。器体は立つ。外底面にまで叩き目が及んでいる。外底面は中窪み。内底面は左回りの断続的な刷毛目。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.3cmの石粒が器表面にみられる。 ○肩部以下の外面に煤付着。
57	口径24 (復原径)	口縁部 ゆるやかに外反したのち口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は面をなす。端部外面には凹線が3条めぐる。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。
56	口径28 (復原径)	口縁部 外反したのち口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は丸くなっておわる。端部外面は凹線状のヨコナデ。内面全体にヨコヘラミガキを施す。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。

録

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
77	口径37.6 (復原径)	口縁部 「く」の字に外反する口縁部。口縁端部はそのまま面をもっておわる。外面に縦方向の刷毛目(8本/cm)。 体部 大部分を欠失する。わずかに外側へ張る器形。口縁部直下に半円形の把手を貼り付ける。把手の貼り付けは体部の刷毛目調整が済んだ後の最後に行なわれたもので、剝離面に刷毛目がみられる。内面はヨコヘラミガキ。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.3cmの石粒が器表面にみられる。
78	口径36.7 (復原径)	口縁部 「く」の字に外反する口縁部。口縁端部はヨコナデによって外側に面をもち、上端に鈍い稜をなす。外面には下から上への刷毛目(7本/cm)がみられ、内面はヨコヘラミガキ。 体部 底部近くを欠失する。器体中位よりやや上に最大径部を有する。最大径部はわずかに外側に張りをもつ。内外面へもタテヘラミガキ。内面の磨き幅の方が太い。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きが顕著。 ○破損部分の断面に赤色顔料が付着。
67	口径24.4 (復原径) 器高10.8	口縁部 外反したのち口縁端部をつまみ上げて「受口状」に仕上げる。上端は丸くなっておわる。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1

番号	法量(cm)	個々の特徴	色調、胎土、備考
67		<p>体部 外側へ張らない浅い塊形の体部。底部近くの外面には叩き目の痕跡がみられる。内外面ともにタテヘラミガキ。</p> <p>底部 しっかりした平底。外底面は中窪み。内底面は体部のヘラミガキが及んでいる。</p>	<p>～0.5cmの石粒が器表面にみられるが内面は磨きが顕著。</p>
74	口径15.6 器高11.6	<p>口縁部 わずかに外反する口縁部。口縁端部はそのまま面をもっておわる。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。外面は右上りで比較的細筋の叩き目(4条/cm)＋右下から左上への刷毛目(8本/cm)。内面は左回りに掻いたのちナデ調整。</p> <p>底部部 しっかりした平底。外面にしぼり痕。外底面は中窪み、内底面は左回りに断続的に掻く。</p>	<p>○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1～0.2cmの石粒が器表面にみられる。</p>
75	口径15.2 器高 7.6	<p>口縁部 わずかに外反する口縁部。口縁端部はヨコナデによって外側に面を作り、上端は鈍い稜をなす。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。内外面ともナデ調整により叩き目を消している。</p> <p>底部部 しっかりした平底。外底面中央は大きく窪む。</p>	<p>○淡褐色。 ○金雲母、角閃石を含む。0.1～0.2cmの石粒が器表面にみられる。</p>
76	口径15 (復原径) 器高 7.6	<p>口縁部 わずかに外反する口縁部。口縁部。口縁端部は丸くなっておわる。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。内外面ともナデ調整により叩き目を消している。</p> <p>底部部 しっかりした厚手の平底。外面にしぼり痕、内底面は左回りに断続的に掻く。</p>	<p>○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1～0.2cmの石粒が器表面にみられる。</p>
71	口径 5.6 器高 5.4	<p>口縁部 口縁端部をあらくヨコナデしただけの直口口縁。端部は丸い。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。外面は右上りの叩き目(3.5条/cm)、内面は左回りの刷毛目(7本/cm)。</p> <p>底部部 平坦面をもつだけの底部。体部との境はない。器体は立つ。外底面は中窪み。内底面は左回りの断続的な刷毛目。</p>	<p>○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前後の石粒が器表面にみられる。</p>
72	口径 4.7 器高 5.4	<p>口縁部 甕の下半部の擬口縁を調整せずにそのまま口縁とする。端部は薄く尖っておわる。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。外面に左よりの大筋の叩き目(2.5条/cm)、内面は左回りに掻いた後ナデ調整。</p> <p>底部部 しっかりした平底。外底面は中窪み。内底面は左回りに断続的に掻く。</p>	<p>○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前後の石粒が器表面にみられる。</p>
73	口径13.8 器高 8.6	<p>口縁部 甕の下半部の擬口縁を調整せずにそのまま口縁とする。口縁部内面には剝離痕がみられることから甕として製作途中何らかの原因で有孔鉢に製作を変更したものである。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。外面は叩き目(2.5条/cm)＋ナデ調整。内面は右下から左上への刷毛目(8本/cm)。</p> <p>底部部 小さな平底。底面に内面から外面に向って穿孔した径1.2cmの円孔がみられる。穿孔の際外面にはみ出した粘土はそのままにしているため、器体を立てることは不可能。</p>	<p>○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1～0.3cmの石粒が器表面にみられる。</p>
68	口径13 器高 6.8	<p>口縁部 甕の下半部の擬口縁を調整せずにそのまま口縁とする。端部は薄く尖っておわる。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。外面はナデ調整。内面は右下から左上への刷毛目(7本/cm)＋ナデ調整。</p> <p>底部部 指圧＋しぼりで作り出した高台状の底部。内底面は左回りに掻く。</p>	<p>○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。</p>
69	口径14.6 器高.7 8	<p>口縁部 指圧痕がみえる。甕の下半部の擬口縁を調整せずにそのまま口縁とする。端部は薄く尖っておわる。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。外面は粘土紐の痕跡を消すべく下から上へ刷毛目調整(6本/cm)する。体部の成形に叩き技法は使用されていない。内面は左回りの刷毛目。外面のものと同体を異にする(12本/cm)。</p> <p>底部部 指圧＋しぼりで作り出された高台状の底部。内底面は左回りの断続的な刷毛目。</p>	<p>○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。 ○外面に叩きを使わずしてこのような器形を完成させていることが注目される。甕にも接合の後叩きを行なったものがあることが理解できる。</p>
70	口径13.4 器高 7.0	<p>口縁部 甕の下半部の擬口縁を調整せずにそのまま口縁とする。端部は薄く尖っておわる。</p> <p>体部 甕の下半部と共通する器形。外面はナデ調整するが粘土紐の痕跡がそのまま残る。内面は左回りの目の粗い刷毛目(5本/cm)。</p> <p>底部部 指圧＋しぼりによって作り出された低い高台状の底部。内底面は左回りの断続的な刷毛目。</p>	<p>○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面に石粒は目立たない。 ○70と同様叩き技法を使わずに器形を仕上げたものである。</p>

脚台

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
79	裾部径9.4	脚部	「ハ」の字形に踏んばった脚部。裾端部は水平面となり内側に粘土がはみ出す。内外面とも指成形。器形からは台付甕になるものかと思われたが、脚上縁部より短く外側に突出した部分の先端が丸くなっておることから組み合わせて使用する脚台とした。	○乳赤色 ○0.1~0.5cmの石粒が器表面にみられる。 ○河内地方の胎土ではない。
80	裾部径10.4	脚部	裾広がりの高台状の脚部。内外面ともナデ調整。脚上縁から外方に胴部がのびる。器形からは台付甕になるものかもしれない。胴部の内外面は下から上への刷毛目調整(6本/cm)。	○赤褐色 ○石粒は目立たないが軟質。

手焙形土器

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
66	口径22.4 (復原径)	天井部 体部	ドーム状の天井部は大半が欠失しており、背面の一部の形状から推定復原した。外面ナデ調整、内面には指圧痕。 開口部分の口縁部は、体部から「く」の字に外反し、端部は内湾ぎみに薄く尖っておわる。口縁部からくびれて再び張り出す胴部の最大径部に貼り付け凸帯をみる。凸帯にはヘラによる刻目を施す。凸帯以下の器形は急速にすばまる。外面ナデ調整、内面に縦方向の刷毛目(7本/cm)。底部付近は欠失するが一応平底をもつものとして復原した。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前後の石粒が器表面にみられる。

異形土器

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
14		胴部 底部	手づくねによる扁球形の器体を4段以上積み重ねた器形。最下段は外面タテヘラミガキ、内面ナデ調整による丁寧な作り。2段目以上は2~3本の細い粘紐を指圧によってひきのばした粗い作りで各段の接合痕は明瞭である。この土器は外側の最大径部でも5.5cmと細いことから、下から順に成形、調整を繰り返して製作したものと思われる。 胴部最大径よりわずかに小さな径の明瞭な平坦面をもつ。外底面は中窪み。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前後の石粒が器表面にみられる。

Ⅱ 類

2重口縁の壺

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
33	口径18.6 器高28.3	口頸部 胴部 底部	直立する頸部から外反したのち、角度をかえて斜上方に外反する。屈曲部には外面に稜、内面に段をもつ。口縁端部はヨコナデによって外側に面をもち、上端は鈍い稜をなす。内外面ともヨコヘラミガキ。外面に櫛描き波状文(4本/cm)、ヘラ先刺突文を、内面に櫛描き波状文を施文する。櫛原体は左回り。 器体中位よりやや上に最大径部を有する。外側に大きく張り出した器形。外面は横ないし斜方向のヘラミガキ。頸部直下に櫛描き直線文、波状文、波状文を施文する。内面は最大径部の接合痕以下に部分的な刷毛目調整を行なう以外、指圧痕+ナデ調整による。 明瞭な平底ながら外底面が彎曲しており、器体を立てることは困難である。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.3cmの石粒が器表面にみられるが、磨きも顕著である。
34	口径19 器高27.6	口頸部 胴部 底部	ゆるやかに外反する頸部から角度をかえて口縁部が外反する。屈曲部には外面に稜、内面に段をもつ。口縁端部は外側を丸くおさめ、上端は鈍い稜をなす。口縁部外面に櫛描き波状文(4本/cm)と竹管を押しした2個1対の円形浮文を4方向にもつ。波状文は櫛原体を左回りに動かしたもので、円形浮文の部分で波状が乱れることから浮文貼り付け後の施文と思われる。また、頸部下端の胴部との接合部分にはヘラ刺突文を有する貼り付け凸帯がめぐる。 器体中位に最大径部を有する球形の胴部。外面は最大径部を境として上半はヨコヘラミガキ、下半はタテヘラミガキ。頸部直下に櫛描き波状文、直線文、波状文を施文。内面は一部に刷毛目がみられるが大半はナデ調整。接合痕が顕著にみられる。 しっかりした平底。外底面は中窪み。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1~0.3cmの石粒が器表面にみられるが、磨きも顕著である。
27	口径18.8 (復原径)	口縁部	直立する頸部から外反したのち、角度をかえて斜上方に外反する。屈曲部は外面に稜、内面に段をもつ。口縁端部はつまみ上げて「受口状」に仕上げる。口縁部外面に竹管文、屈曲部に竹管を押しした2個1対の円形浮文を施文する。内面は右回りのヨコヘラミガキ。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。

加飾する器台、高杯

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
28	口径19.6 器高15	杯部	形態は2重口縁の壺口縁部に類似し、斜上方に短くのびた杯底部より、角度をかえて直立したのち外反する口縁部が付く。屈曲部は外面に稜、内面に段をもつ。口縁端部は上下に拡張し、上下端は稜をなす。端部内外面にはそれぞれ櫛描き波状文(5本/0.6cm)を施し、屈曲部にも波状文をみる。櫛原体の動きは左回り。外面ヨコヘラミガキ、内面タテヘラミガキ。口縁部には隅丸三角形の穿孔が5方向に行なわれている。穿孔部の断面にもヘラミガキがみられる。施文のち穿孔したもの。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きか顕著。 ○脚柱中央部が杯底部にまで至ること、杯口縁部に三角形の透し穴を穿つことから器台とした。しかし、口縁端部内面に波状文を施すことなどからは、第五様式の器台と同様の用途かどうかは不明。 ○1号非戸出土
29	口径18.3 器高10.9	杯部	形態は2重口縁の壺口縁部に類似する。口縁端部は27の壺口縁部と同様の「受口状」に仕上げられる。口縁端部内面には櫛描き波状文(7本/cm)が2帯めぐる。口縁部外面にも波状文を施す。櫛原体は左回り。外面は下から上への刷毛目(6本/cm)＋タテヘラミガキ。内面は横方向の刷毛目＋タテヘラミガキ。	○明褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1～0.3cmの石粒が器表面にみられるが磨きも顕著である。 ○1号非戸出土
		脚部	細長い中空の脚柱部。裾部の形態は杯部を逆にふせた恰好のもの。脚柱部外面はタテヘラミガキ、裾部外面はヨコヘラミガキ。内面はナデ調整。中空部は径1cmで下から穿孔したもの。裾部には径0.7cmの円孔が上下段にそれぞれ4方向穿たれている。	

有段杯部の小形高杯

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
30	口径12.5 器高11.2	杯部	斜上方にのびる杯底部から角度をかえて口縁部が上方に立つ。屈曲部には外面に明瞭な稜、内面に段をもつ。口縁端部は外面に凹線状のヨコナデ、上端は丸い。杯底部は外面放射状の細筋のヘラミガキ、内面は横方向の刷毛目(6本/cm)＋放射状ヘラミガキ。外面の放射状ヘラミガキは口縁部から連続して施したもので、口縁部では暗文状となる。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は磨きか顕著。 ○杯部の器形は加飾する高杯と一部共通し、脚部の器形は塊状杯部の小形高杯と共通する。
		脚部	短い中空の脚柱部より角度をかえて大きく広がる裾部が付く。外面は細筋のタテヘラミガキ。内面は脚柱部しぼり痕、裾部左回りの刷毛目。	

塊状杯部の小形高杯

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
35	口径12.4 (復原径)	杯部	浅い塊状を呈する杯部。口縁端部は丸くなっておわる。外面は横方向の細筋のヘラミガキ、内面は暗文状のヘラミガキ。	○淡赤褐色 ○金雲母、角閃石の微粒を含む。胎土精良。
36	口径11 (復原径)	杯部	塊状の杯部。口縁端部は丸くなっておわる。外面は横方向の細筋のヘラミガキ、内面は暗文状のヘラミガキ。杯外底面には脚部の剝離面と摺きし痕がみられる。	○褐色 ○金雲母、角閃石の微粒を含む。器表面は磨きか顕著。
37		杯部	脚柱上面を杯内底面として接合後にヘラミガキを行なっている。外面横方向、内面縦方向の細筋のヘラミガキ。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石の微粒を含む。器表面は磨きか顕著。
		脚部	細い中空の脚柱部。外面縦方向のヘラミガキ、内面ヘラ削り。	
38		脚部	細い中空の脚柱部。脚柱上部に杯部粘土の剝離痕。外面縦方向の目の細かい刷毛目(12本/cm)。内面はしぼり痕＋ヘラ削り。裾部は欠失する。	○淡赤褐色 ○金雲母、角閃石の微粒を含む。
39	裾部径17.2 (復原径)	脚部	短い中空の脚柱部から角度をかえて大きく広がる裾部が付く。裾端部はそのまま面となっておわる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は脚柱部しぼり痕、裾部は横方向の刷毛目(8本/cm)＋タテヘラミガキ。裾部には径0.7cmの円孔が5方向に穿たれている。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。器表面は平滑。
40	裾部径18.1 (復原径)	脚部	脚柱部は欠失する。裾部は内湾ぎみに大きく広がる器形。裾端部はそのまま面となっておわる。外面は縦方向の目の細かい刷毛目(12本/cm)、内面も左回りの刷毛目。	○淡赤褐色 ○金雲母、角閃石の微粒を含む。胎土精良。

布留式に続く高杯

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
31	口径22.3	杯部	水平方向にのびる短い杯底部より、角度をかえて斜上方に大きく外反する口縁部が付く。口縁端部は丸くなり、内側に若干肥厚する。内外面ともに横方向のヘラナデ調整。内面はその上に放射状の暗文を施す。底部と口縁部は接合部ではずれている。	○淡赤褐色 ○胎土精良で含有物質の観察は困難であるが金雲母、角閃石の微粒は認められる。
		脚部	中空の脚柱部。裾部は欠失する。脚柱上面は杯内底部となり、杯部との接合後ヘラミガキが行なわれている。外面は縦方向の刷毛目(10本/cm) + タテヘラミガキ。内面はしぼり痕がそのまま残る。裾部は欠失する。	○甕61~62と同様の色調、胎土。
32	口径26.4	杯部	形態は同上。口縁端部は丸くなっておわる。外面は目の粗い刷毛目(6本/cm) + ヘラナデ調整。内面はその上に放射状の暗文を施す。	○淡赤褐色 ○31と同様の胎土。
		脚部	形態は同上。裾部は欠失する。外面は縦方向の刷毛目(15本/cm) + タテヘラミガキ。内面はしぼり痕がそのまま残る。	

甕

番号	法量(cm)	個々の特徴		色調、胎土、備考
60	口径18.2 器高27	口縁部	胴部からゆるやかに外反する。口縁端部はヨコナデによって外側に面をもち、上端は稜をなす。外面下半部には叩き目がみられることから、胴部との境は叩きを行なった後に折り返したものであることがわかる。	○淡赤褐色 ○胎土精良で含有物質の観察は困難であるが、金雲母、角閃石の微粒は認められる。
		胴部	器体の上から1/3程のところに最大径部を有する倒卵形の器形。器体中位よりやや下に接合痕があり、これを境に叩き目の主軸方向は変化する。接合痕以上は右回りで主軸方向が連続する叩き目。接合痕以下は顕著な右回りの叩き目。この下半部の叩き目は接合部分において上半部の叩き目の上に行なわれていることから、下半部の叩き目は接合後のものとみられる。叩き目原体は同一で比較的細筋のもの(4条/cm)を使用。接合部ではさらに下から上への刷毛目(10本/cm)調整を行なう。内面は下半部が下から上、上半部は左回りのヘラ削り。器厚0.4cmと薄い。	○外面下半に煤付着。 ○1号井戸出土
		底部	わずかに平坦な面を残す尖り底。底面にまで叩きが及んでいることから平底を保とうとしたものではなく丸底を指向している。	
61	口径18.6 器高23.2 (復原値)	口縁部	「く」の字に外反する口縁部。口縁端部はヨコナデによって外側に面をもち、上端は稜をなす。外面下半に叩き目がみられ、胴部との境は折り返しによるが、折り返しは鋭角をなし内面には鋭い稜がめぐる。	○淡赤褐色 ○胎土精良で含有物質の観察は困難であるが、金雲母、角閃石の微粒は認められる。
		胴部	器形中位よりやや上に最大径部を有する球形に近い器形。外面の叩き目は右回りで主軸方向をほぼ同じくするもので、接合痕ならびに叩き目方向が変化する明瞭な一線をみ出すことはできない。胴部全体を連続して叩いたようにもみえる比較的細筋の叩き目(4条/cm)である。叩き目の上には部分的に叩き目原体によってナデたような痕跡、さらに底部近くには下から上への刷毛目(6本/cm)がみられる。内面は下半部が下から上、上半部は左回りのヘラ削り。器厚0.3~0.4cmと薄い。	○外面全体に煤付着。底部近くだけにはみられない。
		底部	わずかに平坦な面を残すだけのほとんど丸底に近いもの。	
62	口径15.6 器高24	口縁部	「く」の字に外反する口縁部。口縁端部はやや内湾きみとなり、丸くなっておわる。外面に接合痕あり。口縁中位までは折り返しによって成形し、その上に粘土を補充して口縁端部を成形する。	○褐色 ○金雲母、角閃石を含む。0.1cm前後の石粒が器表面にみられる。
		胴部	器体の上から1/3程のところに最大径部を有する倒卵形の器形。外面は全体を目の細かい刷毛目原体(15本/cm)によって撞いており、叩き目はみられない。内面は下から上へ粗くヘラ削りしたもの。器厚0.3cmと薄い。	○1号井戸出土
		底部	尖り底きみの丸底。尖り頂部を中心に径10cmの円形黒斑がみられる。	
58	口径16.4 (復原径)	口縁部	「く」の字に外反し、口縁端部はつまみ上げきみにヨコナデして「受口状」に仕上げる。上端は鈍い稜となる。内面左回り、外面縦方向の刷毛目(11本/cm)が認められる。	○淡褐色 ○金雲母、角閃石を多く含む。器表面平滑。
		胴部	内面右回りにヘラ削り。口縁部との境は鋭い稜をみる。	○器形は甕62に類似するが胎土、焼成は異なる。煤付着。
59	口径16.9	口縁部	「く」の字に外反し、口縁端部は薄く丸くなっておわる。外面をヨコナデすることによって端部は反転きみとなる。	○暗黄褐色 ○金雲母、角閃石を含む。
		胴部	肩の張る器形の外面には右回りの比較的細い叩き目(4条/cm) + 縦方向の刷毛目(7本/cm)をみる。内面は左回りにヘラ削りする。器厚0.3~0.4cm	○口縁部の器形は甕53と類似する。煤付着。

V ま と め

1. 遺構について

今回の調査で発見された遺構は、素掘りの井戸2基である。土壌とすべきかもしれないが、井戸と認定した理由は2基とも湧水層の淡青灰色砂層を底としていたことによる。2基の井戸からは、いずれも廃絶時などに土器を使用して「祭祀」が行なわれていたことがしれた。すなわち、1号井戸の廃絶時においては、上下の2回にわたり、下では甕2と器台1をセットとし、上では壺2と高杯1をセットとして祭址を行なっていた。2号井戸は、底部で1回壺を使用し、上面で1回甕2と壺1を使用していた。

1号井戸で見られた祭祀形態は、この時期の井戸遺構に対する祭祀を考えるうえで重要なものであろう。また使用された土器のセットからは、この時期の土器の使用状況を示していて興味深い。

2基の井戸の使用期間は、ベースとしては、あまり強くない砂質土に掘り込んだ素掘りのものであるため、さほど長期にわたるものではなかったと考えられる。

2. 出土土器について

第V様式以降の土器は、弥生時代から古墳時代への移行期の時代相を反映したものとして、さらに地域間の社会的関係や集落内部の様相を考察する際の重要な資料として近年とみに注目されつつある。馬場川遺跡もこのような移行期に営まれた集落の一つとして、昭和48年には第V様式土器が、昭和50年には布留式土器が地点を異にして出土している^①。今回、報告を行なう井戸遺構出土の土器は、第V様式と布留式の間を埋める資料として、中河内地方の一集落における実態を示す好資料となるものである。ここでは、前項で観察した土器の編年上の年代観と馬場川遺跡にみる特色についてとりまとめを行ないたい。

井戸遺構出土土器の年代観 中河内地方の第V様式土器は、東大阪市西之辻遺跡各地点の土器に代表されるように、畿内第V様式の土器研究の標準資料となっている。なかでも第V様式初頭に位置づけられる西之辻I地点出土の土器は、第IV様式の特徴を残す貴重な資料として、その編年上の位置はほぼ動かし難いものと考えられている^②。しかしながら、第V様式を3型式ないしは4型式に細分した場合^③、中葉以降の段階を明確に規定し、他地域の土器とも比較検討できるようまとめた資料には、なお充分なものは認められていなかった。このような状況のなかで、第V様式中葉以降の土器を甕にみられる叩き技法の発展過程として把えて細分する考えが、都出比呂志氏によって公表された^④。それによると、第V様式の新しい時期の甕は、『甕の外反する口縁部を胴部成形後に新たに接ぎたしてつくる手法以外に、胴上半部上端の口縁相当部分が外反するように連続的に叩き伸ばし、さらに頸部のクビレ相当部分を外から両手で絞って口縁部を作り出し、その後口縁部の端をつまみあげ気味にヨコナデ調整を施す』『口縁叩き出し手法』と「叩き締め」によって器壁を薄くする手法、さらに『成形第1段階を除いた胴上半部では、タタキメ方向を何回も変えることなく連続的に施す』『連続ラセンタタキ方法』によって特徴づけられるとして、このような製作手法の発達を段階的に把えて第V様式中葉以降に上六万寺式、北鳥池下層式の各標式を設定した。そして、『西之辻E(D)式や上六万寺式

と北鳥池下層式との間には、「叩き締め効果」の点においても「連続ラセンタキ手法」の点においても一つの飛躍的な進歩がある』と考えた。さらに、北鳥池下層式の次に設定した上田町I式については、『北鳥池下層式と上田町I式との共通点は大きいが、内面へラ削り技法の存否をより重視すると上田町I式を次期への大きな変わり目と考えることができる』としている。

以上のように、中河内地方の第V様式土器は、3型式ないしは4型式に細分されており、西之辻I式以後の各段階の編年観には甕の製作方法の変遷が基軸となっていることがわかるのである。このような研究成果を踏まえて井戸遺構出土の土器をみてみよう。

2基の井戸遺構から出土した土器は、きわめてバラエティーにとんだ器形から構成されている。しかもこれらの土器は、素掘りの井戸内より多くは完形に復元できる状況で出土したことから遺構が継続した短かい期間に投棄あるいは置かれたものと思われ、また、1号井戸から胴内面を削る甕や加飾する器台高杯、2重口縁壺が出土し、2号井戸から2重口縁壺や布留式に続く高杯が出土していることから、2基の井戸遺構の時期差についても大きな隔たりがあるとは認められなかった。従って、いまこれらを甕の内面へラ削り技法の存在から上田町I式期の土器とすれば、甕において内面を削るものと削らないものとが混在するだけでなく、壺、高杯などにおいてもそれぞれ新旧の器形が混るという特色をもつことになる。そして、このうちI類の甕は、内面へラ削り技法が馬場川遺跡において出現する直前の様相をも同時に示していると考えられる。そこで、各器形の類例を中、南河内地方の他遺跡に求めてみた。(表1)

第V様式末の土器 この表をみると、広口壺(a)、長頸壺(a)、高杯(a)などの器形は第V様式前半期に比定される西之辻I地点、E地点の土器にすでに類例がみられることがわかる。また、

編年観 編年階	I類											II類											甕の製作手法					
	広口壺(a)(5)	広口壺(b)(9)	長頸壺(a)(1)	長頸壺(b)(1)	長頸壺(c)(6)	長頸壺(d)(3)	長頸壺(e)(3)	直口壺(1)	高杯(a)(4)	高杯(b)(12)	甕(a)(16)	甕(b)(12)	鉢(a)(1)	鉢(b)(1)	鉢(c)(1)	鉢(d)(2)	器(1)	手摺土器(1)	2重口縁壺(5)	加飾する器台(2)	小鉢高杯(4)	小鉢高杯(3)		布留式に続く高杯(2)	胴内面を削る前(2)	胴内面を削る前(3)		
西之辻I	●				●				●		●	●															西之辻I E地点 上田町II	
見塚	●	●	●		●			●		●	●	●	●															上田町II
上六万寺	●	●					●	●	●	●	●	●	●	●	●													
船橋	●	●					●	●	●	●	●	●	●	●	●													上田町II
上田町II	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		

第1表 井戸遺構出土土器形別対照表

● ①内は識別可能な制作枚

※ 北鳥池下層式馬場川遺構の胴内面へラ削り技法を十分に消化している東大阪地域の地味色とその編年の位置をふらわし、馬場川形(北河内の上田町I)と併存する。

- ①、② 小林行雄(後掲注2)
- ③、④ 東大阪府遺跡調査会年報1 1975
- ⑤ 徳岡高校地歴部「河内古代遺跡の研究」1970
- ⑥ 中西清人他「大田川環境整備事業の原地区高本教習正工事に伴う船橋遺跡調査報告書」1976
- ⑦ 原正三(後掲注6)

長頸壺(e)、高杯(b)などは、第V様式中葉以降に編年上の年代観をもつ上六万寺遺跡、北鳥池遺跡下層に類例がみられる。甕の口縁形態も同様で、「く」の字に外反し端部がそのまま面となっておわる形態や口径20cm以上の大形の「受口状」口縁は第V様式初頭にはみられる形態である。このように形態からみると、井戸遺構出土の土器から知られる第V様式末の土器は、前半期にすでに出現している器形が量的には減少しながらも残存することがわかる。しかし、そのいっぽうで長頸壺(e)、高杯(b)のような第V様式後半期に現われる器形が加わり、「受口状」口縁が甕の口縁形態の半分近くを占め、無文の広口壺や長頸壺や鉢にも同様の口縁形態をみることなどがこの時期の土器に顕著であるといえよう。

また、第V様式土器の推移をあらわす甕の製作手法には、「口縁叩き出し手法」や「連続ラセンタタキ手法」が認められる。「口縁叩き出し手法」によって製作された甕は、確認できるものだけで19個体中の9個体に認められ、第V様式初頭にみられる口縁形態の甕もこの製作方法によっていることなどから、第V様式末の甕には器形にかかわらず用いられた手法と考えられる。「連続ラセンタタキ手法」は北鳥池遺跡下層出土の比較的大形の甕に特徴的であるが、井戸遺構出土の土器には大形のものが少ないこともあってかやや稚拙な感じを受ける。さらに、比較的大形の甕(63)、(64)などのように胴部最大径が口径をはるかに凌ぐものは「叩き締め効果」によると考えられ、都出比呂志氏が「連続ラセンタタキ手法」と「叩き締め効果」が顕著になる段階として設定した北鳥池下層式に製作手法のうえでは近い内容を示すものとなっている。しかし、これらの手法を駆使した結果とされる球形胴は、北鳥池遺跡下層出土の土器ほど顕著なものではないこともまた事実であり、器形の面でも第V様式前半期の残影がみられることなどにより、井戸遺構出土のI類の土器を北鳥池下層式そのものとして比定することには躊躇するのである。このように、中河内中部の生駒山地西麓という限られた地域に存在し、同じような編年上の位置を占めると考えられる2つの遺跡の土器にも、共通する特徴とともに大きな相異点が存在するのであり、この相異点は次のII類の甕からもうかがえるのである。

第VI様式の土器 井戸遺構出土のII類の甕をみると、甕(60)、(61)は全体の器形において尖り底を有する古相の上田町Ⅱ式甕⁽⁵⁾に類似することがわかる。ところが淡赤褐色を呈し、砂粒をあまり混えない胎土からは、馬場川遺跡で製作されたものか搬入されたものかは決めかねるものの少なくとも暗褐色を呈する上田町Ⅱ式甕そのものではないといえる。また、甕(62)は、「く」の字に外反する口縁端部が丸くなっておわり、倒卵形の胴部外面には叩き目を残さない特徴ある土器であり、I類の土器に類似した胎土を使用することからは馬場川遺跡において製作されたものとみなすことができる。これらII類の甕は、1号井戸内で甕(62)とI類の甕(63)とが並んで出土し、その下に甕(60)の出土が認められていることから、I類の平底を有する甕とともに製作使用されたものであることが確認できる。また、畿内の各地で出土することが知られている暗褐色の上田町Ⅱ式甕が搬入されていないことも事実としてあげられる。従って、馬場川遺跡において胴内面を削る甕が製作されているにもかかわらずI類の甕に球形胴、丸底化が顕著でないことの原因は、馬場川遺跡におけるII類の甕が生活様式のなかでの一定の用途のためにだけ少量が生産されたものであるゆえ、畿内各地へ搬出する程の大量の上田町Ⅱ式甕を生産した地域での型式変化の様相とは本質的に異なることによると考えられるのである。

上田町Ⅱ式甕は吉備地方からの伝播とされる内面へラ削り技法が畿内において先に達成され

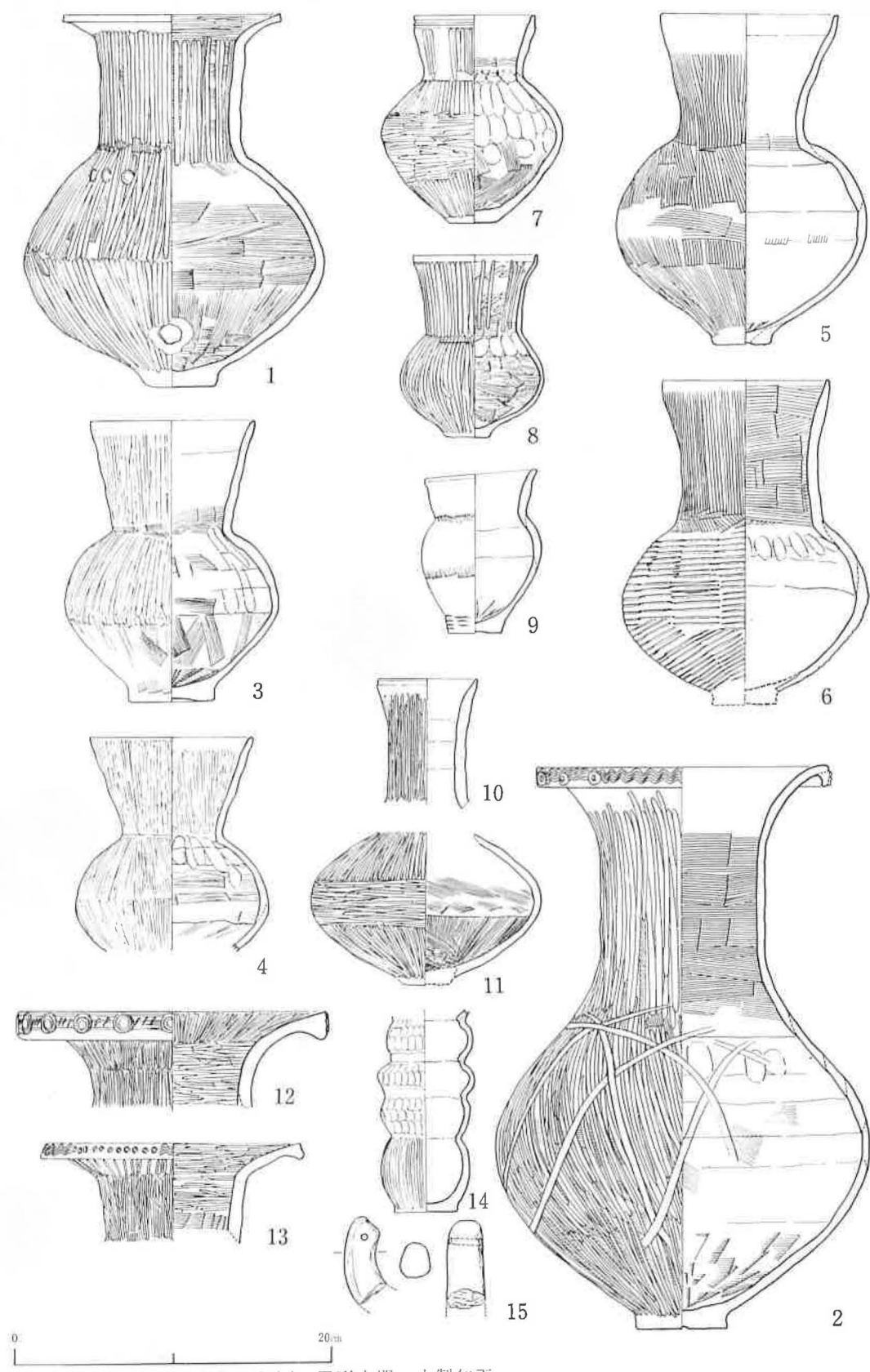
ていた球形胴、丸底化した甕に受け入れられて出現したものと考えられ、^⑥それゆえ北鳥池下層式にみる球形胴化は型式学的に上田町Ⅱ式甕の出現を説明する際の一つの段階として意義をもつものと思われる。しかし、北鳥池遺跡にも東大阪市域以外の胎土を使用した胴内面を削る甕が出土していることから、北鳥池下層出土の土器そのものが上田町Ⅱ式甕へと直接連らなるものでないことが知られるのである。このようなことから、中、南河内地方における第Ⅴ様式末以降の土器にみられる球形胴、丸底化の傾向は上田町Ⅱ式甕を製作したと想定される中河内南部～南河内北部のより限定された地域において典型的にみられる現象と考えられ、その他の地域においては北鳥池下層の土器のように球形胴化が進みながらも次期の内面へラ削りを行った甕は搬入されている場合や井戸遺構出土の土器のように球形胴、丸底化の傾向はみられるものの、未発達のまま内面へラ削り技法を間接的に受け入れたと思われる場合など、さまざまな地域色をみることができるのである。

最後に、壺、高杯の器形をみると、広口壺(a)、長頸壺、高杯(a)、(b)のⅠ類に伴って2重口縁壺、加飾する高杯、器台、有段および塊状の杯部をもつ小型高杯、布留式高杯の祖形と思われる高杯などのⅡ類が出土したことが特色となろう。これらは、出土状況からみて供献のために井戸遺構に投棄あるいは置いたものと思われることから、井戸遺構に行なわれた供献の様式はⅠ類の壺、高杯によって行なわれた供献様式からⅠ、Ⅱ類が混った供献様式へと変化する傾向が考えられる。これらを全体として把えると、馬場川集落では、集落内部において第Ⅴ様式土器を中心とした生活様式の残影のなかに、新しい器形にもとずいた生活様式が組み合わせられていたことが推察される。そしてそこに、Ⅰ、Ⅱ類の土器を包括して第Ⅵ様式と把える意義をみ出すことができるのである。井戸遺構出土の土器は、短い期間の所産として複雑な内容を提示するものとなったが、ここにみる供献様式も小型精製土器の出現を境としてより定型化された古墳時代の供献様式へと変化するものと考えられ、その定型化に古墳時代の新しい生活様式の成立を認めるものとなるであろう。

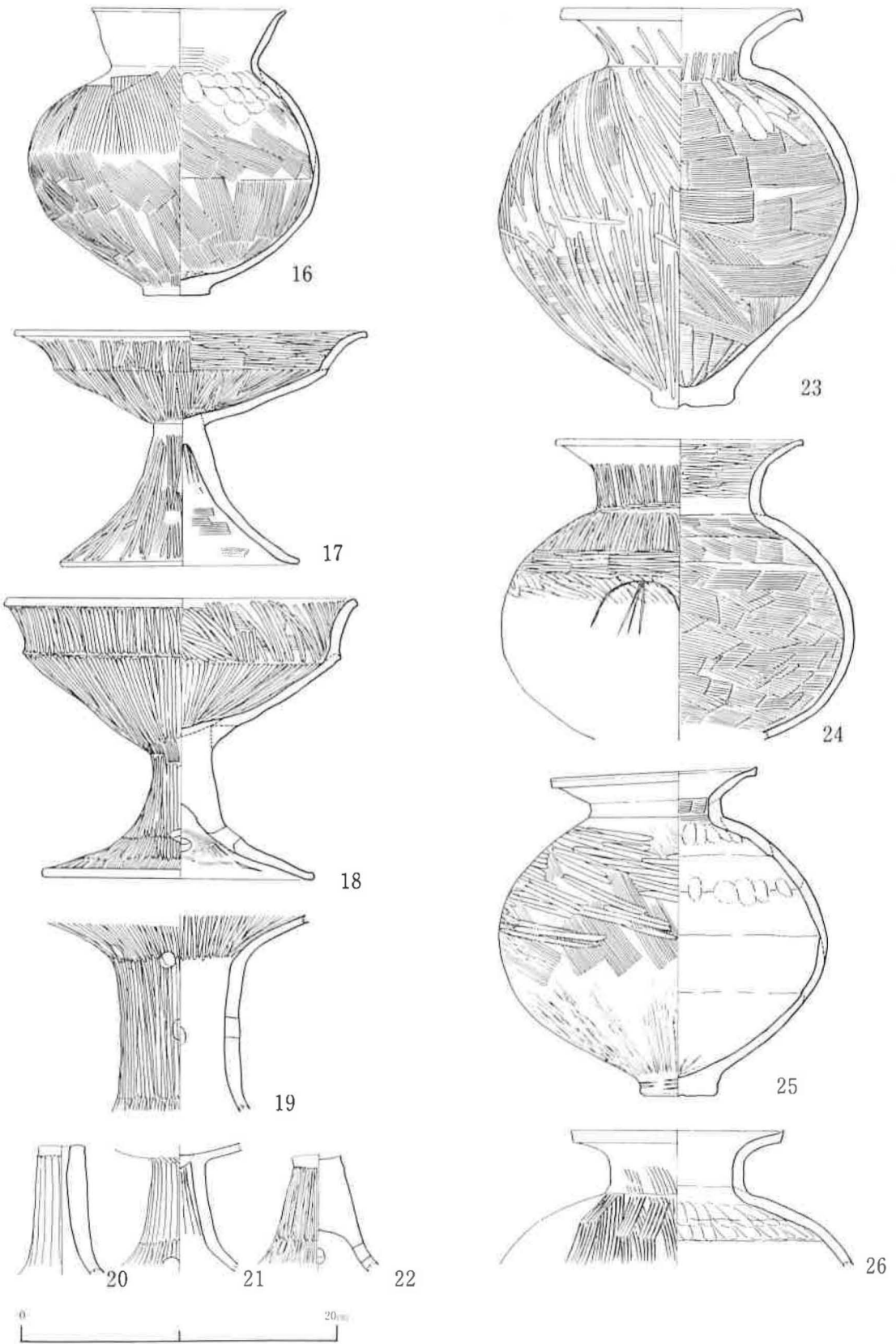
注

- ① 「馬場川遺跡Ⅲ」 東大阪市教育委員会 1975
「馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ」 東大阪市教育委員会 1976
- ② 小林行雄 「弥生式土器集成資料編」大阪府枚岡市額田町西之辻遺跡Ⅰ地点の土器 1958
佐原 真 「弥生式土器集成本編2」畿内地方 1968
- ③ 小林行雄氏は西之辻遺跡各地点の土器の変遷を第Ⅴ様式を西之辻Ⅰ式、E式、D式の順に考え、坪井清足氏は西之辻D式のあとに唐古45号堅穴上層式を加えた。
- ④ 都出比呂志 「古墳出現前夜の集団関係」 考古学研究第20巻第4号 1974
- ⑤ 原口正三 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」 大阪府島上高校研究紀要3 1965 上田町遺跡第1層出土の胴内面を削る甕も暗褐色を呈するものと報告されていることから、この種の土器を上田町Ⅱ式甕と呼ぶことにする。
- ⑥ 原口正三、前掲⑤、都出比呂志 前掲④

圖
面
·
圖
版

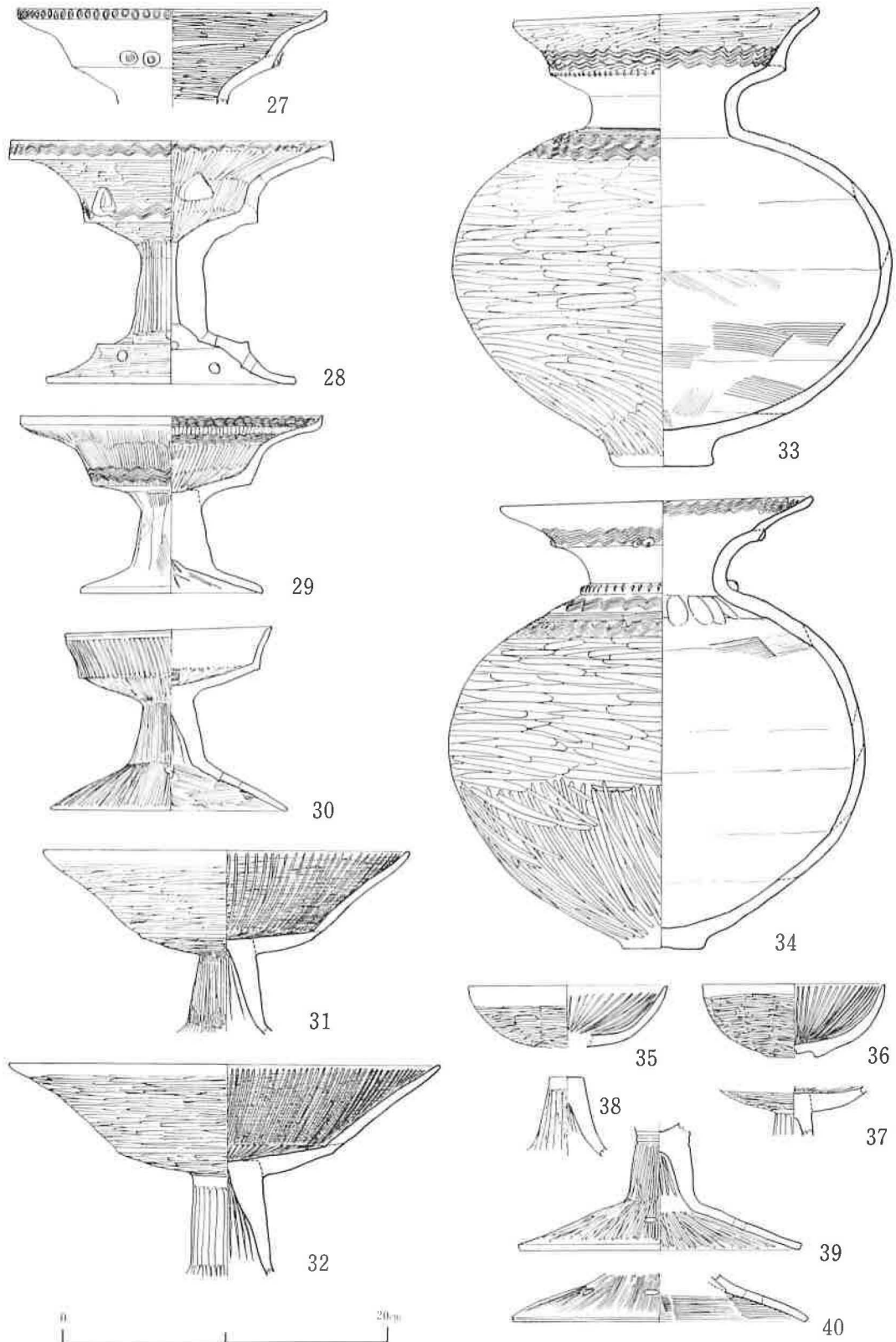


長頸壺(a)(b)(c)(d)(e) 広口壺(a)、異形土器、土製勾玉

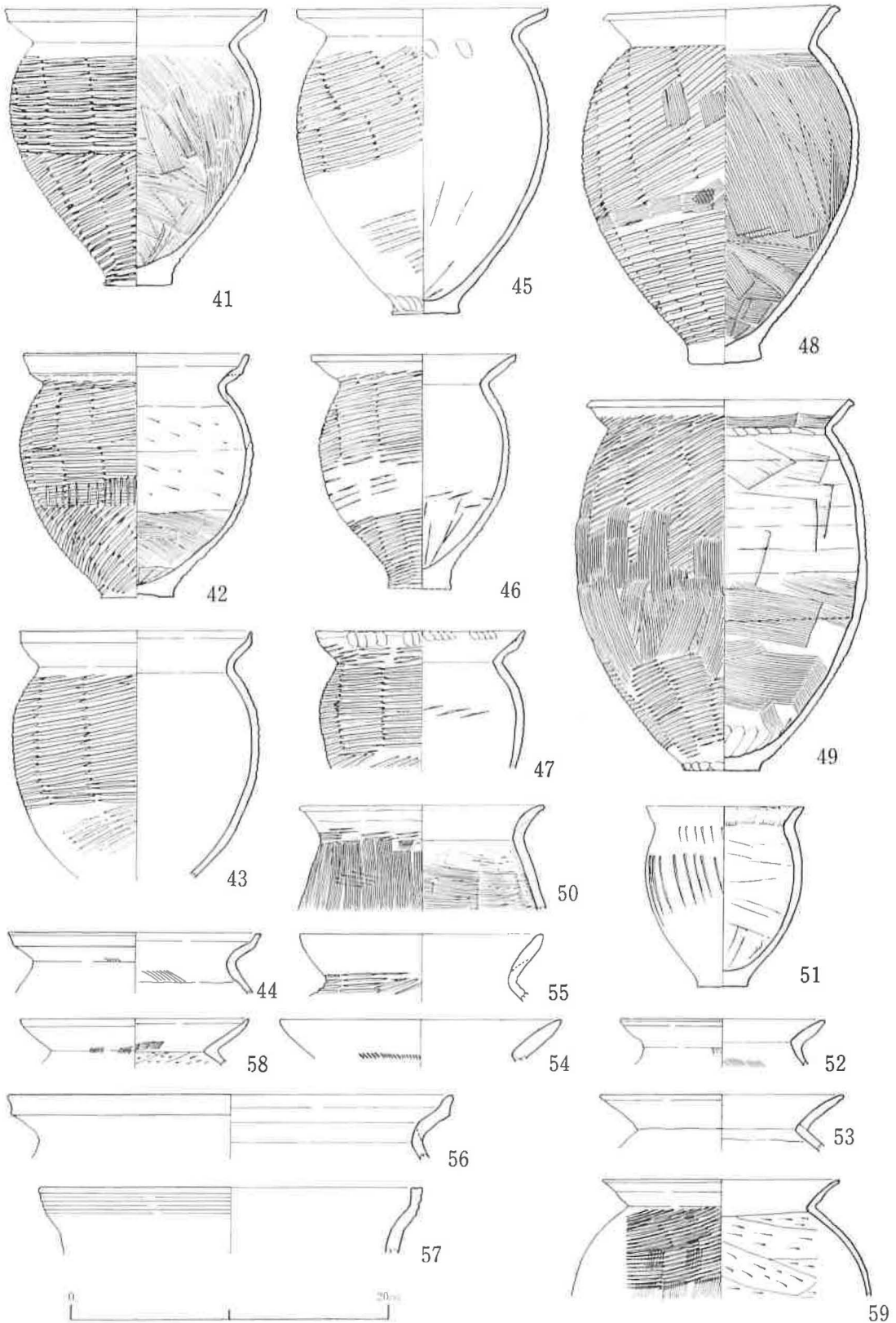


直口壺、広口壺(b)、高杯(a)(b)、器台

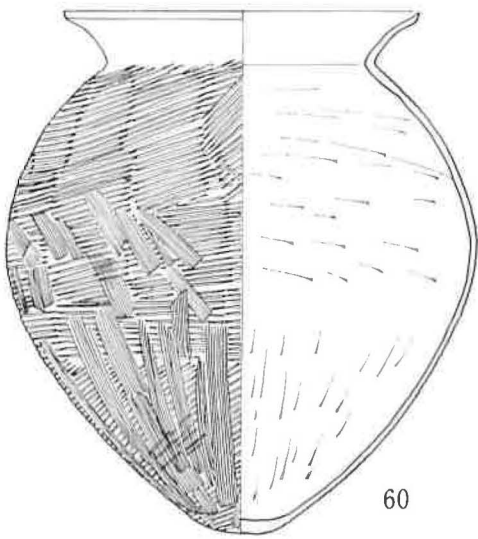
図面3 弥生土器実測図



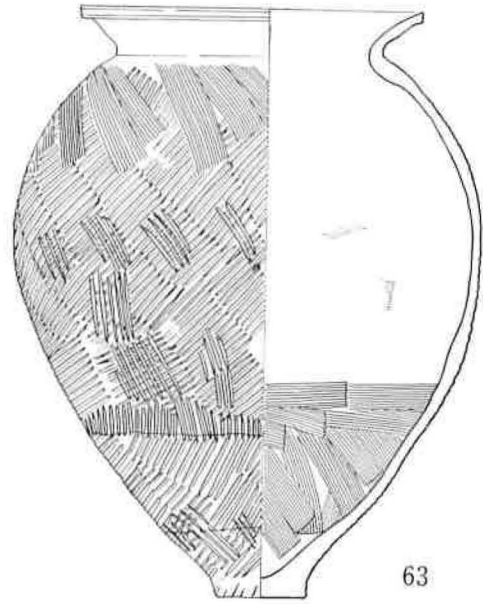
2重口縁壺、加飾する高杯、器台、有段杯部の小型高杯、碗状杯部の小型高杯、布留式に続く高杯



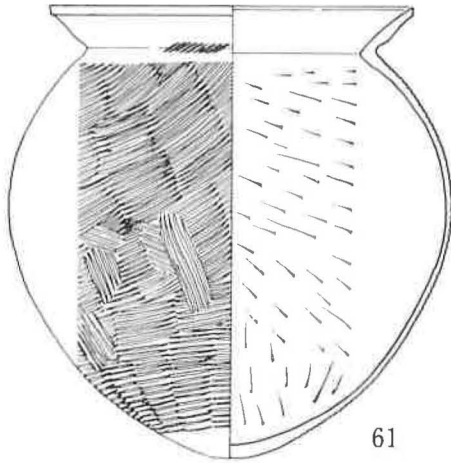
甕(a)(b)、胴内面を削る甕(a)(b)



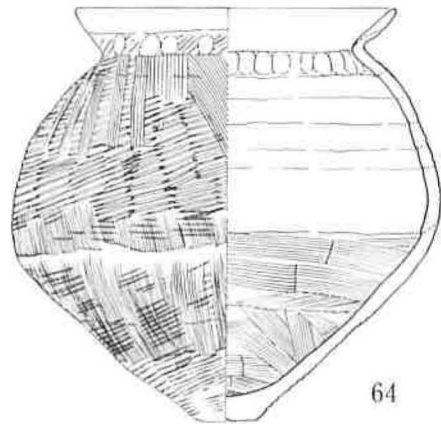
60



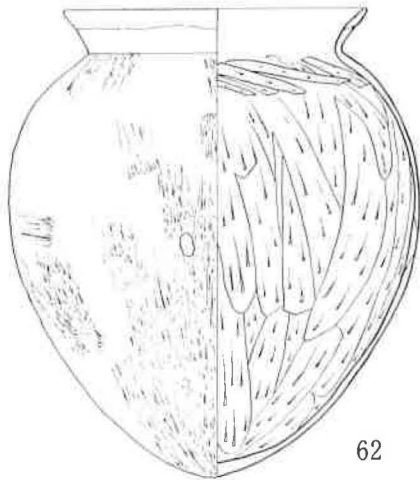
63



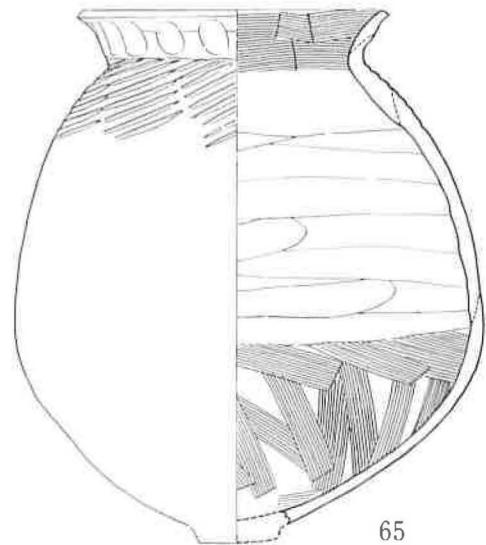
61



64



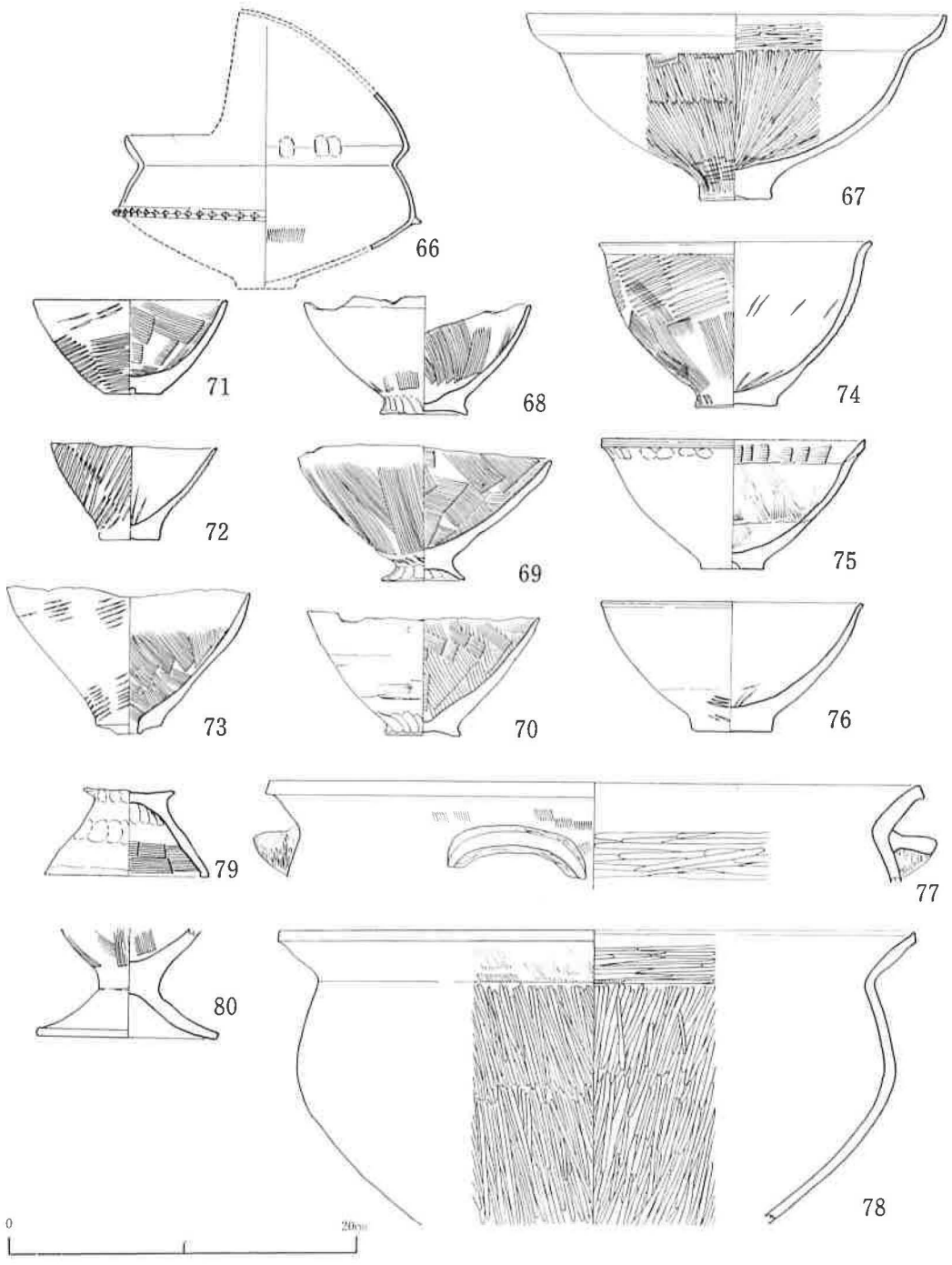
62



65

0 20cm

甕(a)(b)、胴内面を削る甕(a)(b)



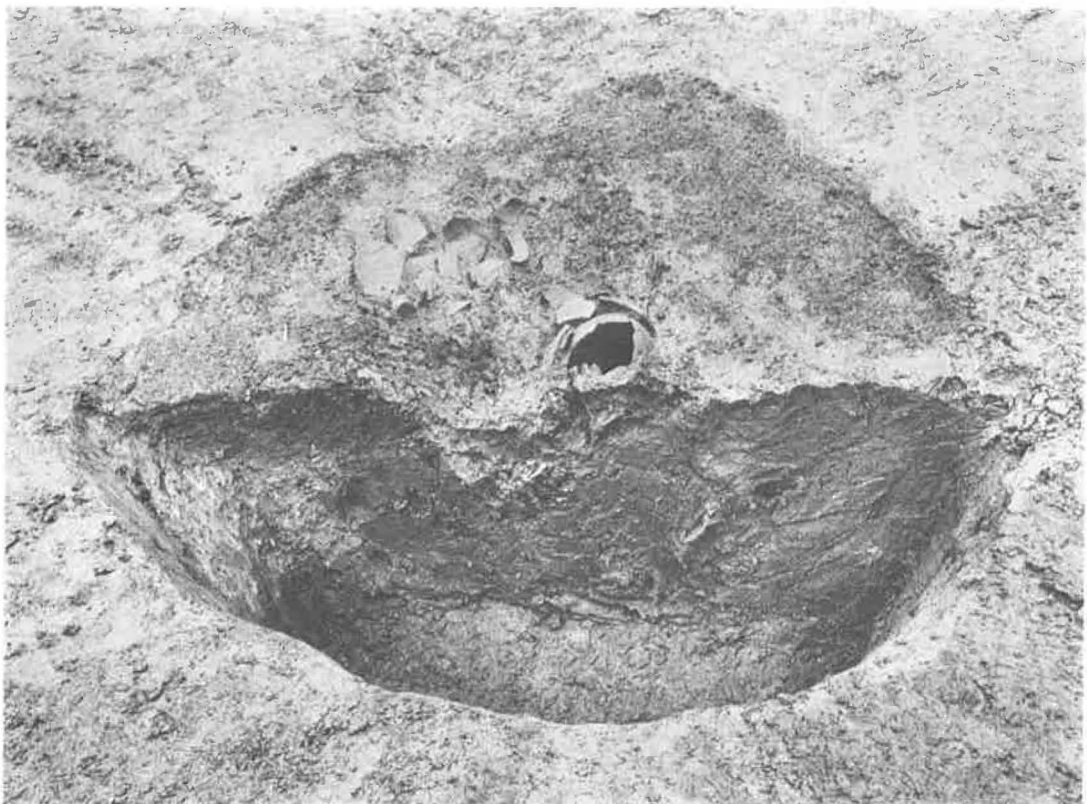
鉢(a)(b)(c)(d)、手培形土器、脚台



遺跡周辺航空写真（西より）昭和48年撮影



上 1号井戸出土状況



下 2号井戸出土状況



上 供献土器出土状况



中 第2次供献土器出土状况



下 第1次供献土器出土状况



上 2号井戸発見
状況



中 2号井戸土器
出土状況



下 2号井戸堆積
土断面



1



7



2



8



9



12



13



3



5



4



6



10



11



16



23



17



24



18



25



30



34



31



36



33



39



28



29



48



49



41



45



42



47



43



51



46



44



53



52



54



55



58



56



50



57



59



60



63



61



64



62



65



69



67



68



75



70



74



73



76



79



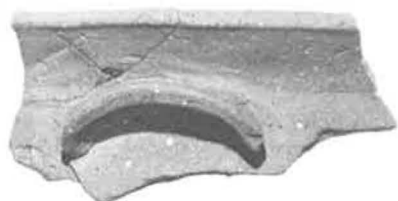
71



78



66



77



14

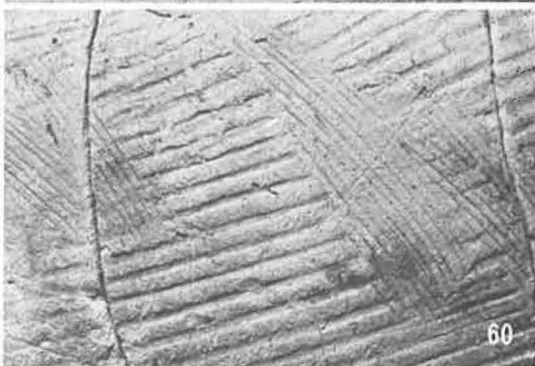
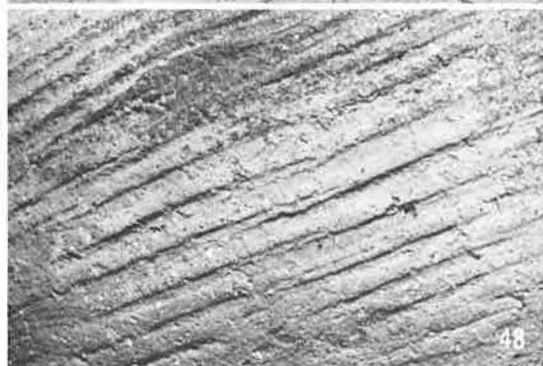
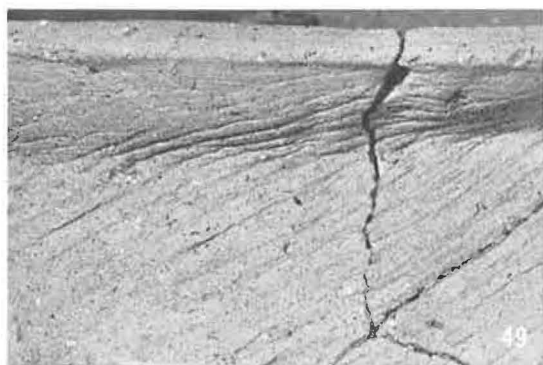


15a



15b





弥生土器 甕の叩き目、高杯、器台の装飾

馬場川遺跡発掘調査報告

発行日 昭和52年3月31日

発行 東大阪市遺跡保護調査会

印刷所 明文堂工業株式会社